



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	ホルクハイマーの批判的人間学(4)
Author(s)	森田, 数実
Citation	東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学, 56: 155-180
Issue Date	2005-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/2818
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

ホルクハイマーの批判的人間学(4)*

森田数実

社会学**

(2004年8月31日受理)

I 人間学的研究の文脈

ホルクハイマーの著作を貫いて、その理論的活動を駆動する一つのエレメントとして、彼の人間学的関心を認識することができる。それは、マックス・ヴェーバーについて言われる、近代性 (Modernität) の条件のもとで生きる人間性の運命への関心¹ と類比可能なものと考えられるような関心で、それが彼の道徳批判、社会批判と結びついている。この関心は、まず初期には、例えば日記や手紙² に表われている。すなわち、ある手紙では若き日の彼が、父親の工場で働く女性従業員に同情を示し、そしてその背後にある市民社会に厳しい批判的態度をとっていることを、われわれは見る。さらにそれは、彼がコルネリウスのもとで専門哲学的・認識論的研究を押し進めるときにも、私的な手記の形で³ 市民社会における道徳、価値、人格といったカテゴリーに対する批判的な思索を深めていった際の、一つの推進力にほかならなかった。

彼のこの関心は、30年代以降、いわゆる批判的理論のプロジェクトのなかで彫琢・発展させられることになる。筆者の考えでは、ホルクハイマーの西欧マルクス主義の視座との出会いは、彼の思想の独自の発展のなかで生じたのであり、この両者の結びつきは、彼における人間学的研究の視点を特定化すると同時に、西欧マルクス主義の視座の受容が独特な形で行われるという事態⁴ を引き起こすことになった。すなわち彼は、一方で彼本来の関心を理性批判の伝統と関係づけると同時に、他方でその問題を [マルクス主義的] 社会科学との関連のなかで追究するのである。筆者は、ホルクハイマーが [市民的] 人間の質、エートスへの問いという人間学的関心を終始持ち続けたということは、

例えばあくまでベンヤミンから継承した言語哲学的視座を一つの基礎として自己の研究を展開するアドルノとの間に、両者の媒介的思考の質の違い⁵ を含めた、幾つかの違いをもたらしたと考えており、本稿でもその一端を解明するよう、試みたい。⁶

以下では、そうした彼の関心と、「批判的理論」という思考・理論類型 - それはその強みと同時に独特な弱点・矛盾を含んでいる⁷ - との「必然的」連関を問う研究プロジェクトへの序章として、彼の人間学的研究の文脈を大まかに特徴づけておきたい。本稿は、次の二つのステップで、この問題を考えてみたい。まず、ホルクハイマーが彼の人間学的関心を批判的理論のプロジェクトへと鑄直しながら吸収・展開する際の媒介となったのは、当時の真理とイデオロギーをめぐる諸問題だったと考えられる。ここで、後のホルクハイマー思想の発展にとって重要となる、二人の思想家の名を挙げる事ができる。言うまでもなく、マルクスとニーチェである。人間の理性・意識にとって社会が構成的であるというテーゼ、そして人間理性は「力への意志」のつくるパースペクティブにすぎないといったテーゼは、周知のように、理性の自律性に疑問を投げかけ、理性批判を新たな段階へと押しやることになった。ホルクハイマーのフロイト受容は、現代思想におけるこの主体把握の社会 [科] 学的、「心理学的」脱中心化の傾向のなかで生じたものと位置づけることが可能である。

ホルクハイマーは、この二人の思想家から、いわゆるイデオロギー批判という思考様式を受容するが、筆者には、その際彼は、ニーチェの提起する問題に、マルクス主義的な社会理論という媒介水準を設定することで答えようとしているように見える。すなわち、ホ

* Kritische Anthropologie Horkheimers (4) / Kazumi MORITA

** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

ルクハイマーの人間学的思想にとって、ニーチェの思想の持つ意味は決定的だった。⁸ ニーチェは、先にも触れたように、啓蒙[主義]の仮借のない完成者として、ハーバースのいう理性批判の全面化⁹をもたらした。まさしく理性批判の歴史にひとつの区切り、いや断絶をつくり出すと同時に、その独特な「心理学」によって、真理を支える、あるいは必要とする人間の心[理]に深く鋭い分析・理解をなした。ホルクハイマーにとって、とりわけ『道徳の系譜学』で展開される「残忍性の心理学」- [権]力への意志、強制、道徳・価値・意味、良心、「欲望」といった概念は、ニーチェにおける「生物学的」説明から、社会と人間におけるその機能の観点へと移行されて考察を深められる- は、彼の市民的人間の理解にとってひとつの模範であり続けた分析である。

しかし彼は、こうしたニーチェの問題提起を、マルクス主義的社会理論に組み込む形で受け止める。彼はマルクスから、「社会」という、個人の経験・意識によって構成的な現実の水準の理解・把握について学び、また同時に哲学的、また人間的問題を「解決」するためには社会変革が必要であるという、変革の意志を学んだ。このなかで彼はニーチェの問題提起を、社会を媒介として歴史的、社会的に、その条件を明確化しつつ特定化し、さらに精神分析など、当時最先端を行く人間科学の成果を取り入れることで、その一面性や不十分な点の訂正も含めて、批判的に掘り下げる形で受け止めようとする。そして彼は、いわばこの市民的人間の自己認識の過程にひとつの「解放」機能を読み込むことで、「超人」を仮定するようなニーチェの「飛躍」を批判し、理性的な社会への希望を表現しようとするのである。本稿では、ホルクハイマーのイデオロギー批判のこの第一の段階、すなわち、理性、広く意識を「社会」に焦点を合わせて批判し、その際ニーチェの「心理学」に重要な媒介としての意味が与えられる段階に関連して、フランクフルト学派、特にアドルノとホルクハイマーにおけるニーチェ受容の特徴の解明をめざしたラートの周到な研究¹⁰を検討することで、ホルクハイマーの人間学的研究の文脈形成にとってニーチェ受容の持つ意味を考えてみたい。(Ⅱ節)

さて、亡命とアメリカ社会・文化の経験、さらに根底にあると想定された社会の管理化・大衆化への趨勢を前に、ホルクハイマー思想に変化が生じることは、すでによく知られている。しかしこの、いわゆるホルクハイマーの「転回」は、いまだに明確な規定の困難な事態であり続けている。¹¹ 前提として想定できる主要なことは、社会の変化によって批判的理論の名宛人、

担い手を見いだすことがもはや不可能と見えたこと、この社会という媒介水準の消滅により、理性批判の全面化がもたらすアポリアが、回避不能な形で現れたこと、などであろう。¹² 哲学的批判の啓蒙する力をもはや素朴に信じることのできない、そうした状況のなかでホルクハイマーは、新たな合理性の理論を求めて困難な思索を進めることになる。その際、彼の思考を構造化するキーワードの、少なくとも一つが、「自然」であることは確かであると考えられるが、筆者には、そこにはホルクハイマーの思考の一つの焦点として「言語」が捉えられてくるという事態が関係していると思える。そしてそれは、ホルクハイマーとアドルノとの関係に関して、ひとつの困難な理論的問題を惹起するものでもある。

すなわち、40年代のホルクハイマーは、自己自身と矛盾・葛藤する理性¹³ という、ひとつの自己分裂に身を委ねながらも、新たな基礎づけを模索していたと考えられる。ホルクハイマー研究の現状では、『啓蒙の弁証法』に現れる「主体の内での自然の想起」という視座、さらにこの時期の彼の言語哲学的研究¹⁴ に、その成果の一端を見、そして彼にこの変化を促した重要な要因の一つとして、アドルノの影響を挙げるのが一般的である。しかし筆者には、言語をめぐる両者の影響関係は、いまだに明確には理解できていない。例えば『啓蒙の弁証法』冒頭の「啓蒙の概念」についての章の第二節、ひとつの象徴の理論の執筆者- 現在のところ、やはりホルクハイマーであろうと考えているが- は、筆者にとってひとつの疑問であり続けた問題だった。

ホルクハイマーのイデオロギー批判の第二段階、すなわち理性と自然との関係に焦点を合わせ、その際言語論的考察に重要な媒介としての意味が与えられる段階を理解するためには、したがって、ベンヤミン-アドルノの言語論を基礎とした考察方法と、ホルクハイマーの思考との同一性と差異性についての検討が必要である。本稿では、ホルクハイマーの人間学的思考の発展理解に対する一つの理解の試み¹⁵ の序章として、きわめて難しいこの問題に、筆者に理解可能な範囲で取り組んでみたい。具体的には、メニングハウスの優れたベンヤミン研究¹⁶ を検討することで、ベンヤミンの思考の特徴を理解すべく努め、それとアドルノの言語哲学的論考¹⁷ との関連- 配置的言語、弁証法的像等などの概念を含む- を考察し、さらにこの視点からアドルノのハイデッガー批判¹⁸ にも触れるという形で、議論を進めてみたい。(Ⅲ節)そしてこの思考との対話をひとつの契機として、「残忍性の心理学」に再構成がなされることで、ホルクハイマーのニーチェ把握にも

実質的に変化が生じていることを示唆したい。¹⁹

そして最後に、以上の検討を踏まえて、ホルクハイマーによる人間学的研究の文脈を、彼の著作・論文のテーマに即して分節化し、その研究の全体的構成の輪郭を描くよう、努力したい。(Ⅳ節)ホルクハイマーの人間学的関心は、哲学的問題設定と社会分析との狭間を行くような彼の思想の歩みの、おそらくは実質的な内容を形成する。以下でなされるのは、その関心の発展・深化を追究しようとする研究プログラムの序章をなす、彼の人間学的研究の文脈形成的要因を特徴づけようとする試みである。

Ⅱ ホルクハイマーのニーチェ受容をめぐって

- [権]力・支配・人間学

ホルクハイマーのニーチェ受容を概観し、その特徴を掴もうとする試みにとって、重要な示唆を与えてくれると思われるのが、ラートの研究である。²⁰ 彼の研究は、一部は互いに競合し一部は相互補完的な、アドルノとホルクハイマーのニーチェ像を年代順に素描し、両者の『啓蒙の弁証法』での交差点へと関連づけるという作業を行うなかで、両者によるニーチェ評価の相違の根拠と、現在の批判的理論におけるニーチェ主義の残滓の掃をどのように考えるべきかを問うている。本稿にとってこの研究は、その周到さと同時にその視点によって、注目すべきものと考えられる。すなわち、ラートによると、ホルクハイマーは、理性批判の自己矛盾というニーチェの提起する問題を、反弁証家ニーチェとは異なり「生物学的」に「克服」しようとするのではなく、社会レベルを介して全体的に受容し、弁証法的に媒介するよう試みることになる。²¹ そしてその際、この問題の心的媒介の考察のなかに、筆者にとって重要な彼の人間学的思想が定式化されることになる。それに対しアドルノは、ハーバーマスに従うと、現代芸術の真正な経験をひとつの独立した洞察の源泉として確保した上で、哲学的批判を、自分自身を否認し、いわば内から透視するような同一性思考の逆説性のなかで循環させるという思考を展開する、ラートはこう言っている。²²

したがってラートの研究は、まず第一に、ニーチェの提起する「真理」と「心理」の問題に対する30年代ホルクハイマーの受容、そして批判のあり方の特徴を確認することに寄与する。そしてそれは第二に、こうした彼の視座の挫折と、40年代におけるホルクハイマーの「転回」に対するアドルノの影響の理解という、より一層の問題に対するひとつの問題提起として受け止

めることができる。次節では、この問題に対する筆者なりの考えを述べたいと思う。以下ではまず、ラートに従って、最初の問題を、『啓蒙の弁証法』に至るまでの二人のニーチェ像を整理することを通じて考えてみたい。

まず、ラートは、ホルクハイマーとアドルノにおけるニーチェ受容を解明しようとする彼の作業にひとつの指針を与えるものとして、1942年7月14日にロサンゼルスで行われた、幾人かの亡命ドイツ知識人による、ニーチェにおける欲求、文化、憧憬、そして現実の関係についての議論²³に着目する。彼らはその際また、社会主義の敗北の原因、啓蒙のプロジェクト失敗の原因、フランス革命が意図した自由、平等、人間の尊厳の政治的、法的制度化の不成功も問題とし、そして反ファシズムの、社会主義的知識人に、この歴史的-政治的状況のなかでまだ可能性はあるだろうか、そもそも彼らは依然、ニーチェに依拠する権利を持っているのだろうか、と問う。ラートは、この議論のなかに、とりわけアドルノの発言をめぐってフランクフルト学派および議論に参加したグループ²⁴のニーチェ像が現れていると見、そしてそこから四つのニーチェ像を取り出すなかで、アドルノの立場を特徴づけようとする。

それに先だって30年代のアドルノの著作でのニーチェについての記述²⁵にざっと触れた後、ラートは、この議論の検討にはいる。ラートは、L.マルクーゼの冒頭報告を、彼[L.マルクーゼ]とニーチェを結びつけるのは、「あらゆる精神的絆 - あらゆる宗教、あらゆる体系、あらゆる保証 - は、正当にも解体した、という洞察」、すなわち「彼の根底的な破壊作業」と「彼の憧憬」であると強調するものとした後、討論のなかで表明される四つの立場を次のようにまとめている。a. ロマンチックな靈感を与えられた、唯美主義的同一化(L.マルクーゼ)。b. マルクスに対する調停不可能な対立のゆえの、ニーチェの拒否(最も険しいのは、H.マルクーゼにおいてである。もちろんその際にはプレヒトの立場も問題となるが、ただしプレヒトはこの議論には参加していない。)c. ホルクハイマーのアンビヴァレントな態度 - 彼はニーチェに批判的に対峙しながら、同時にニーチェから学ぼうとする。d. アドルノの「ニーチェ-マルクス主義的」立場。²⁶ まず、ラートに従い、アドルノとホルクハイマーのやりとりを見ながら、ひとつの拡張された、批判的に先鋭化され変更された社会主義の概念のためにニーチェを動員する、アドルノの立場を明らかにしておこう。

以下では、ラートの優れた記述を、ほぼ翻訳に近い形で紹介することにしたい。²⁷ ラートはアドルノの立

場の理解のために、アドルノの次の発言を引用する。「ニーチェにあって、彼の理論が真であるところでは、自然力[Element]を示すことができます。彼は、単に民主主義だけでなく社会主義も、ひとつのイデオロギーとなってしまうことを見抜きました。社会主義を定式化するなら、社会主義がそのイデオロギー的性格をなくすように行わなければなりません。ニーチェは、彼が市民に対して、ひとつのより鋭い嗅覚を持っていた限り、若干の決定的な事柄では、マルクスよりも先へ進んでいました。」それに対してホルクハイマーは批判の優位に対する問いを立てるとして、ラートは続けてホルクハイマーの次の発言を引用する。「マルクスは、社会にいまだに特定の物質的貧困が支配している限り、われわれがなすべきことは、それを無くすこと以外にはない、と言いました。こうした状況の下で事柄をその名で呼ばない著述業、諸関係を変えることが問題であると言わない著述業のすべては、ひとつの深い矛盾を背負い込んではいませんか。」しかしアドルノは、マルクスを超えるような、啓蒙主義と社会主義についての進歩的な構想にとってニーチェが持つ模範としての性格に固執する、とラートは続ける。「ニーチェは、社会主義の観念はひとつの実践概念に結びついていることを知っています、すなわちそれがどの程度、まさにこの社会のひとつの反省形式でないのかが、まだ完全には明らかでないような実践概念にです。」「実践、組織などの概念の連関全体は、すでにニーチェの段階で、ようやく今日[ファシズムとスターリニズムの時代に、N.R.]完全に見えるようになるような面貌を示していました。」

ラートは、ニーチェはここではアドルノにとって、独自の支配および実践批判の先駆者になると言い、次のアドルノの発言を引用する。「ニーチェは、手もとにある一連のカテゴリーを一層推進するため、日々の要求から逃れました。彼は、実践概念それ自体では、ひとつの野蛮な世界と野蛮でない世界との現実的違いを適切に捉えるためには充分でないことを見抜きました。彼が自己の哲学に指図を含ませなかった、まさにその箇所に、彼の真理の契機があります。一切を包括する、定義を下す実践には、支配の形式を支配なしに再生産し続けるような傾向があります。支配が人間のなかへ入り込んで定着するということは、人間が、不可視の支配によってあらかじめ与えられた以外の欲求を持たない、ということの意味します。」ラートによると、アドルノは、ニーチェは「全体的実践の概念には有害な何かがある」ことに気づき、したがってアドルノはニーチェの思考に批判的ポテンシャル - 社会主義における

イデオロギー的諸要素、伝統的な文化批判、実践および支配についての俗流マルクス主義的観念、将来と進歩に対する楽観論に対する批判のポテンシャル - を発見したのである。

さて、ラートも言うように、ニーチェを社会主義的な文化・実践・支配概念のひとつの自己批判のために利用しようとするアドルノのプロジェクトには、幾つかの障害が立ちはだかる。ラートによると、ニーチェの断固とした反社会主義的的自己理解、またホルクハイマーの、社会の批判的理論はまず第一に貧困、困窮、飢餓といった現実と取り組まなければならないのではないか、という問いなど、自己のプロジェクトに不利となるような事態に対してアドルノは、ニーチェをニーチェ自身が理解したよりもよく理解する必要性を強調する。ラートは次のアドルノの発言を引用している。ニーチェの文化批判は、「彼のカテゴリーにも拘わらず、[...]政治経済学の批判によって直ちに与えられていない、社会の問題の特定の相を指示しています。彼は特定の批判的意図を、マルクス以後の伝統のなかで発展させられた以上に、押し進めました。われわれは、ニーチェを解釈し、背後にある根本的な経験に含まれるものを見なければなりません。そうすれば人は、たいいていの人間の関心からさほど切り離されていない事柄に至ると、私は信じます。『羊飼いのいない、ひとつの群れ』というイメージには、ある仕方で支配は直接的な支配形態よりも長く生きることが可能ではないか、という推測が隠れています。支配は、人間自身のなかに入り込んで定着することが可能でないかどうか。人間は、支配されることなく支配されていることが可能ではないか。[そういう推測です。]」

ラートの言うように、アドルノは「物質的基盤」の批判に対する「上部構造」の批判の劣位ということ認めない。アドルノの見方では、「上部構造」の要素が久しい以前に「下部構造」に入り込んで定着し、主観性と客観性とが「第二の自然」という複合体へと融合したような歴史的状況では、イデオロギー批判と美学とは、異なる手段での社会批判の継続であることができる、ラートはこれが、アドルノのニーチェ解釈の基礎ともなっているような前提であると言う。アドルノはこう言っている、「われわれは、この翻訳作業を行うことで、短期的な唯物論を超えるものを実現させるよう、試みるべきでしょう。」

ラートは、アドルノはこの攻撃を受けやすい発言によって、三重の批判に身を晒すとし、その批判を先に挙げた四つの立場と関係づける。a. ニーチェ主義者の批判。「アドルノは、ニーチェをマルクス主義の靴型に嵌

めることで、ニーチェを救おうとするのです。」(L. マルクーゼ)；b. マルクスの立場から、マルクスとニーチェとの両立不可能性に固執する者の批判。「マルクスが正しいなら、ニーチェは間違っています。」(H. マルクーゼ)、あるいは、「人はマルクスによってニーチェを解釈することはできませんが、しかしその反対はできません。ニーチェは革命家ではありません。」(アンダース)；c. マルクスとニーチェという対蹠者の、大胆かつ逆説的に見えるこの結びつけの、還元主義的な定式化の変更。「アドルノが言おうとしたのは、ニーチェにあって特定の構造がとる表現は、単なる反映といったものではなく、それは必然的な何かを表わしているということです。」(ホルクハイマー)

しかしラートによると、この最後のホルクハイマーの立場は、ファシズムによるニーチェの利用から学ぼうとする、それも内在的なニーチェ批判を通じて学ぼうとするアドルノの試みを、あまりに性急にホルクハイマーの意図と同列に置くものである。ラートはこう言っている。「ホルクハイマーの意図は、ニーチェを、唯物論的な社会理論を基礎に『客観的に』、幕を開けた帝国主義の時代における危機現象を表現する人として解釈し、そしてニーチェの心理学的洞察を、社会心理学的に検討・利用し、新たに定式化しようとするところにある。それに対してアドルノにはそれ以上のことが問題である。すなわちマルクスとニーチェを手掛かりにして、ひとつの拡張された社会主義の概念を入手・彫琢することが問題であるからである。」²⁸ このホルクハイマーの立場に対するラートの解釈を検討することが次の課題となるが、その前にラートがこの討論から取り出す四つのニーチェ像を簡潔にまとめたパラグラフはそのまま紹介に値すると思われるので、ここで引用しておきたい。

「1942年7月14日の討論には、四つの異なったニーチェ像が基礎となっている。ニーチェは、a. 同一化の対象人物と見なされるか、b. 自己の理論的同一性を対抗的に主張せざるを得ない著作家と見なされるか、c. 矛盾に満ちた敵方の理論家と見なされるか、あるいは、d. ラディカルなイデオロギー批判者の模範と見なされる。その際、ニーチェは、a. 後期ロマン派の芸術家と理解されるか、b. 反啓蒙の先鋒でありファシズムの先駆者と理解されるか、c. 啓蒙主義者であり同時に反啓蒙主義者であると理解されるか、あるいは、d. マルクスをも超えたところを指し示す、最もラディカルな啓蒙主義者であり、批判的理論の主要な証人と理解される。そのことに、ニーチェに対する立場における、あらかじめ決定された、相互に対立する方法論が対応す

る。a. 修辭的承認、b. 論争的に排除する批判、c. 「客観的な」、外在的解釈、d. 批判されるものを自己の内に止揚することを要求する内在的な、弁証法的批判、である。後のニーチェ解釈も、ここにあるモデルにさほど無理なく当てはめられるであろう。a. にはM. フーコー(1971)あるいはP. スローターダイク(1986)、b. にはG. ルカーチ、さらにおそらくまたJ. ハーバース(1985, PDM)、c. にはA. シュミット(1963)あるいはJ. ハーバース(1968)、d. にはH. シュヴェッペンホイザー(1980)あるいはネクト/クルーゲ(1981)が当てはまる。²⁹ 議論の背後にある態度を標語へと単純化すると、次のような言葉になろう。a. 啓蒙ではなくニーチェを！b. ニーチェではなく啓蒙を！c. ニーチェとともに、またニーチェに抗して、さらに彼を超えて啓蒙を！d. ニーチェなくして進歩する啓蒙なし！」³⁰

さて、ラートは、アドルノの立場を中心にして学派に関連するニーチェ像を描いた後、そこでも触れられていたホルクハイマーの立場、すなわちニーチェ思想の「客観的な」、外在的解釈の立場を、30年代ホルクハイマーの一連の著作³¹のなかに跡づけていく。彼によると、ホルクハイマーのこのニーチェ受容は、反駁と魅惑の交差するアンビヴァレントなものだった。ラートの記述は、この反駁と魅惑の両極に社会理論という媒介を設定するという形で、ホルクハイマーの立場を理解しようとするものと考えられる。彼によると、まずホルクハイマーが反駁を加えるのは、とりわけ奴隷制の正当化にまで至る、ニーチェの「貴族・エリート主義」と大衆に対する軽蔑と表現できるだろう側面である。代表的なものとして、『黄昏』からの次の引用を挙げておきたい。「彼[ニーチェ]は、大衆を軽蔑するが、しかしにも拘わらず大衆を保存しようとする。彼は、自分のユートピア的貴族の淘汰のための余地を得るために、弱さ、臆病、服従を維持しようとする。貴族が浮浪者としてあちこち歩き回らなくていいためには、当然彼らに他の者がトーガを縫わなくてはならない。というのも彼らは、大衆の汗によって生活できないなら、自分自身機械の側に立たなくてはならないだろうからである。そこではディオニュソス賛歌が途絶えたことは自明である。実際ニーチェは、大衆が存在することに非常に満足しており、彼が、搾取と貧困とに基づくシステムの現実的敵対者として現れることは、決してない。」³²

そしてラートは、ホルクハイマーはこうした拒否から、ニーチェの光学のひとつの反転を勧めるとし、引用を続ける。「ニーチェの目標は、プロレタリアートの目標ではない。しかし、プロレタリアートに協調的で

あることを勧告する道徳は、この支配階級の哲学者に従うなら、惑わしにすぎないことが気づかれる。ニーチェ自身が、大衆に、この装置を壊すことを彼らから妨げるのは、恐怖だけであることを銘記させる。大衆がこのことを真に理解するなら、かてて加えてニーチェは、道徳における奴隷反乱をプロレタリアの實踐に転換させることに寄与することさえできる。³³ 同じ見方は、「唯物論と道徳」からの次の引用にも見ることができる。「彼[ニーチェ]は、彼が憎む性質は現在、まさに一般性にとって有利な条件の欠如の結果として生じることを認識しなかった。」「ニーチェの歴史理論は的を外れている。彼は目標を、たしかに彼岸にはないにしても、それでもやはりひとつの転倒した世界に置いている。というのも彼は、現在の世界の運動を、経済法則の知識の欠如ゆえに誤解しているからである。けれども彼自身の道徳は、彼が戦っている道徳の要素と同じ要素を含んでいる。彼は自分自身に怒り狂っている。」³⁴

それに対して、ラートによると、ホルクハイマーがニーチェに魅惑されるのは、とりわけその心理学的洞察と分析の鋭さによる。例えばラートは、「権威と家族」でホルクハイマーが何度も引き合いに出す分析は、再び心理学者ニーチェのそれであるとし、こう続ける。ニーチェは、人間の「社会的本性」の強制的性格を見抜き、宗教の起源およびその機能様式を - 「歴史の力という宗教」や「理念という神話」に至るまで - 明瞭にするような情報提供者として引用される、と。ホルクハイマー思想のこの側面と、フロイトの理論の導入とが密接に関わることは、言うまでもない。しかしホルクハイマーは、この側面に対しても社会理論の媒介を設定しており、それは例えば、「エゴイズムと自由を求める運動」で、ニーチェによるヨーロッパのニヒリズムの告知に対して、そこではその現象に対する社会的前提条件が考慮に入れられていないため、それはそもそも克服可能かどうか、理解できないとする批判³⁵が加えられ、またそうした媒介を欠くがゆえに、ニーチェの心的現象の分析は、きわめて繊細であると同時に粗すぎる、という判断が下されることにもなる。

ラートは、ホルクハイマーのニーチェ賞賛は、両刃的なものであり続けている、という。彼によると、ホルクハイマーは、[ニーチェの]心理学的洞察力、徹底した反形而上学性、容赦のない反市民性にどんなに感嘆しても、彼はニーチェの反啓蒙主義的、反民主主義的、反社会主義的主張、彼の大衆蔑視と人格『崇拜』、暴力支配への彼の不安定な態度、奴隷制への彼の賛辞を、無視することができない。³⁶ それは、アドルノにとって

ニーチェは、あくまで美的モデルネの一人の告知者であり、まさにそれゆえ先駆者および模範としての抜きんでた位置価値を得ているがゆえに、アドルノはこうした無視をはるかにうまく達成しているのと対照的である。ラートは、こうしたニーチェに対するホルクハイマーのアンビヴァレントな態度は、初期の険しい告発から、ファシストに対してニーチェを守るため、次第に穏やかなものとなっていったと判断している。このニーチェとマルクスの狭間を行くような、30年代ホルクハイマーの人間学的思考を、より分節化して追究することが、筆者の研究プロジェクトの第一の内容をなす。³⁷

さて、次にラートは、以上のような考察から、『啓蒙の弁証法』の含む二つのニーチェ像を取り出し、対比しようとする。ここでは、すでに触れた、この著作の出発点となっているアポリアについてのラートの言及をいま一度確認した後、彼の記述を筆者の研究プロジェクトの第二の内容への問題提起として受け止める方向で議論を進めたい。

『啓蒙の弁証法』には、ひとつの亀裂が存在すること、すなわち、二人の著者の精神的気質の緊張はこの著作の生のエレメントである、とする新版(1969)への序言は、真面目にとられる必要があることは、個々の章の執筆者を特定化しようとする努力³⁸が進むとともに、今日のフランクフルト学派研究で広く認められていると言ってよい。ラートによると、それは、二人は44年の序言で言及されたアポリアに異なる仕方で答えていることを意味する。ラートはこのことを、ハーバーマスからの引用を用いて両者を比較する形で、次のようにまとめている。

「ニーチェ以来、事情はくり返し同じである。根底的な理性批判は、自己関係的なやり方をする、つまり批判は、根底的であるなら、同時に自己の基準に手をつけずそのままにしておくことはできないのである。ホルクハイマーはこのアポリアによって不安になっている。[...]彼は、啓蒙の同一性を放棄し、ニーチェ主義の手に帰するよりは、矛盾に巻き込まれる方を欲した。[...]しかしテキストでは、興味深いことに、この立場のための拠り所が見いだされるのは、ホルクハイマーの筆跡を示す章においてだけである。」それに対してアドルノは、「哲学的批判の啓蒙する力にだけ賭ける必要はなかったし、むしろ哲学的批判を、自己自身を否認し、いわば内から透視するような同一性思考の逆説性のなかで循環させることができた。そのわけは、彼には現代芸術の真正な美的経験が、ひとつの独立した洞察の源泉として、自らの意味をうち明けたからである。」³⁹

そして付言して、初期ロマン主義、ニーチェ、そしてベンヤミンの継承のなかで、範例的にはシェーンベルクの音楽およびカフカの散文作品の経験のなかである、と言っている。ラートはこうした視点から、『啓蒙の弁証法』の二つの補論でのニーチェへの言及について、次のような特徴づけを行う。

彼によると、アドルノが執筆者と考えられる第一補論「オデュッセウスあるいは神話と啓蒙」では、ニーチェは、ヘーゲル以来、啓蒙の弁証法を認識した数少ない者の一人として現れる。すなわちアドルノによると、ニーチェは、啓蒙の支配に対する分裂した関係を定式化した、すなわちニーチェは「啓蒙のなかに、独立した精神の普遍的運動 - 彼 [ニーチェ] は自分をその完成者と思っていた - も、生に敵対的な『ニヒリスティックな』力も認めただけで、彼のファシズム以前の継承者にあっては、第二の契機だけが残され、そしてイデオロギーへと倒錯させられている。⁴⁰ ラートは、アドルノはニーチェを「文化ファシストたち」 - おそらく考えられているのは、とりわけクラゲスとシュペングラーである - から厳密に分離し、そして『オデュッセイア』を合理化過程、個体化過程の一段階と解釈することの正当化をニーチェから読み取る、とする。『道徳の系譜学』は、批判の直接的模範である、というわけである。⁴¹

それに対して、ラートによると、ホルクハイマーの手になると考えられる第二補論「ジュリエットあるいは啓蒙と道徳」では、ニーチェおよびサドによる実践理性の仮借ない批判が、暴力と支配の正当化に導くことが示される。ラートは、ニーチェとサドからの抜粋を平行して差し出す、ホルクハイマーの意識した冷静な文体は、かろうじてその嫌悪の念を隠しているにすぎないと言っているが、ホルクハイマーはそこで、ニーチェとサドの代弁者たちとの、キリスト教、同情、人間愛に反対する意見の一致を際立たせる。すなわち、サドの『ジュリエット』では、支配と暴力とは自然なものだ、といわれているが、それは、「ニーチェが、ルサンチマンの心理学を補って現在に突きつけた、あらゆる支配階級の秘かな信条」であり、そして形式主義的理性は、不道徳とよりも道徳とより密接な関係に立つわけではない。

このようにラートは、ニーチェはホルクハイマーによっていま一度はっきりと、ファシズムの精神的先駆者の烙印を押される⁴²、とするのだが、しかしラートは、ホルクハイマーにとってニーチェの思考に属する真理は、弁証法的批判のなかで明らかとなるような、ニーチェ自身にも隠された、「客観的」真理なのである、

と論を進める。彼はホルクハイマーから次の引用を行う。「君主道徳は、文明に対する抗議としては、正反対に、抑圧された者たちを代弁していた。萎縮した本能に対する憎悪は、その犠牲者においてのみ現れる厳しい監督者の本性を客観的に告発している。しかし強大な権力としての君主道徳は、現下の文明の権力に、安定多数派に、ルサンチマンに、そしてかつて反対したすべてに、身を捧げる。ニーチェは、自己の思想が実現されることによって反駁され、また同時に彼に属する真理が解き放たれる。彼の思想の真理は、生に対してイエスと言うにも拘わらず、現実の精神には敵対的だった。」⁴³

ラートはホルクハイマーの読みの結論を、ファシズムのなかでニーチェの思想が「現実化」されることで、ニーチェは、反駁されると同時に正しいことが確認されたところに見る。彼によると、反駁されるのは、この思考のなかのイデオロギー的なもの、すなわち奴隷制、暴力、支配を自然なもの、変えることのできないものとして弁護することである。正しいことが確認されるのは、現代の現実、およびニーチェの時代にはその現実のなかでまだ眠っていた全体的破壊のポテンシャルに対する否定的態度にまで至る、断固たる批判の身振りと精神である。ラートは、ニーチェの思考とファシズムの空疎な反動的イデオロギーとの間には、現実的共通性は存在しないとアドルノに対して、ニーチェを全体的に受容するホルクハイマーは、それゆえの矛盾・分裂を背負い込み、そうしたなかでニーチェの真理を救い出すために、ニーチェのテキストにひとつの弁証法的な読みを施している、と言う。筆者は、ラートのこの解釈には若干疑問があり、それを検討することが、筆者の研究プロジェクトの第二の内容への導入ともなると考える。

すなわち、ラートに従うと、ホルクハイマーにとって、真理は表面にはない、したがって彼は、ニーチェの著作を、再録羊皮紙のように解読する。「もとのテキスト、著者自身によって無視されたものであるがしかし基礎的なもの、を復元するためには、テキストの極端な言葉を入念に組み合わせることが必要である。『完全な否定性は、一度注目されたなら、その反対物の鏡映文字へと結晶するが』 - ユートピア的解釈学のひとつの格率である - 、そうであるならニーチェの『支配と理性との同一性』という説には、破り開くような認識の契機がある。すなわち、この同一性に甘んじてはならない、という契機である。」⁴⁴しかし、ここでラートが論証の基礎として引用しているのは、アドルノの『ミニマ・モラリア』からの文章である。

さらにラートは、「誇張だけが真理である」とのホルクハイマーの言葉と、それへのアドルノの賛意に触れた後で、こう続けている。「反弁証家ニーチェは、ひとつの弁証法的な読みという冷温交互浴を受けさせられ、それによってはじめて逆説的、『否定的な』弁証法の模範として依拠することが可能となる。啓蒙の批判者は、啓蒙から新たな神話への飛躍を遂行する人物として現れると同時に、自己反省的な啓蒙の最も首尾一貫した続行者として現れる。モデルネの敵対者は、モデルネの美的反省の祖として理解されるのである。」⁴⁵ ラートによると、美的モデルネに対する親和性の大きさの違いによって、矛盾による感染に身を晒す(ホルクハイマー)か、あるいは反省の伸展のなかで矛盾を止揚するよう試みることができる(アドルノ)ことになる。

しかし筆者は、こうしたラートの解釈は、ホルクハイマーの立場をアドルノのそれへと引き付けすぎていると思う。ホルクハイマーには、先の引用が暗示するような弁証法的像というような視点、さらには広く終末論的な志向は存在しない、あるいはあったとしてもきわめて弱いと思う。むしろ筆者は、ジュリエットの章は、いわゆるホルクハイマーの「転回」との関連で、すなわち理性批判の全面化、自己自身と矛盾・葛藤する理性という問題を、「主体の内での自然の想起」という視点のもと、「自然」と「言語」の問題系に即して考察しようとするホルクハイマーの「変化」との関連で解釈することが可能であると考え。このホルクハイマーの新たな視点の定式化に、アドルノの言語哲学的な見方が影響を与えたことは確かだと思われるが、しかし、例えば一方の配置的言語というような言語把握と、他方の概念的把握による抑圧された「自然」の表現というような、ある種素朴ともいえる視点との間には違いがあると言わなければならない。筆者の研究プロジェクトの第二の内容⁴⁶への序章として、次節ではアドルノの言語哲学的な見方について、メニングハウスのベンヤミン研究を手引きとして、筆者なりに考えてみたい。その前に、『啓蒙の弁証法』後の両著者のニーチェ像について、ラートの言うところにごく簡単に触れておきたい。

ラートによると、ホルクハイマー晩年の著作は、外部へ向かう、一般公開的な、啓蒙的な変種 - 晩年20年間の講演、論文、インタビュー - と、自己理解のためだけに思索された、部外者には分からない、徹底して悲観的な変種 - 『覚書』 - とに分裂している。⁴⁷ ラートは、シュミットとは異なり⁴⁸、それを、マルクスとニーチェという、互いに相容れない準拠理論の間でのホルクハイマーの動揺の現れと見る。形而上学批判の

科学的真理概念への跳ね返りというモチーフが、哲学へと向けられると、そこに思想の死という事態が生じる。ニーチェは、彼の深いペシミズムの準拠人物の一人であるが、他方でマルクスとの関係では、理論の全体としての実体化は不合理であることが示された。ラートは、巨大な理論的努力の後で、すなわち啓蒙主義、カントとヘーゲル、マックス・ヴェーバーとディルタイ、マルクスとフロイトを通り抜けた後で、ショーペンハウアーで地がつくられ、ニーチェによって動揺させられ、故郷喪失となったホルクハイマーの批判的理論は、逆説に終わる、と言う。すなわち、社会的矛盾を言い表わすことと、それをめざすような理論の自己矛盾を言い表わすことが、ホルクハイマーの批判的理論にまだ残されていること、その最後の誠実なのである、と言うのである。⁴⁹ ラートは、社会理論の明らかな可能性を疑わせるこの苛立ちは、普遍的語用論に指向して新たにされるような批判的理論のプロジェクトでは、このプロジェクト自身とてかえって損なことに、忘れられる可能性がある、と付け加えている。

それに対してアドルノ晩年の哲学は、ニーチェとの親和性を示している、とラートは言う。彼によると、アドルノがニーチェに、イデオロギー批判、文化診断学、美的モデルネへの加担にとってのひとつの模範を見ていることは、『ミニマ・モラリア』で特に明瞭であるが、そこでニーチェは、くり返し刺激を与える人、保証人として引き合いに出され、批判されることはほとんどない。さらにラートは、『否定の弁証法』に対するニーチェの意義について、ニーチェはアドルノの「否定の形而上学」の展開にとって、形而上学的真理概念の容赦のない批判者として重要な役割を演じている、と強調する。「ニーチェの真の継承者は、ハイデッガーの存在論ではなく、批判的理論でなければならない。ニーチェだけが、哲学の持つ『漂うもの』、哲学と音楽との親和性を明白なものとした。」⁵⁰ そしてこの視点から、『否定の弁証法』と『美と美学の理論』の関係について、次のように述べている。 - 「『否定の弁証法』と『美と美学の理論』とは、真理は仮象なしには存在しないがゆえに、互いに指示し合い、互いに支え合うことが可能である。哲学はそれを知っているが、しかしそれについて語ることはできず、芸術はそれを示すが、それを定立的に述べることはできない。哲学は、真理や理性といった自己の最高概念でさえ有する仮象性格についての幻想に、もはや身を委ねないのだから、芸術『よりも真』である - ニーチェの後では、注意せよ、芸術は、『経験的知識』から徹底的に分化したような領域であるがゆえに、哲学『よりも真』である。芸術作

品はその仮象性格を、捨てることも隠すこともできない、モデルネのなかでは、いよいよもってできない。」⁵¹

最後に、ハーバーマスによる批判的理論の継承とニーチェとの関係について、ラートの言うところを一言だけ記しておきたい。彼によると、ハーバーマスは、認識関心をめぐるニーチェ評価⁵²から、理論戦略的なニーチェの否定へと動いたが、それは批判的理論の二者択一的状態を打破しようとする意図と結びついていた。すなわち、一方で批判的理論は、ニーチェの哲学の逆説的性格にあまりに強く感染されたままであるなら、自己矛盾的で、基盤を欠き、亀裂の入ったものになる。ハーバーマスの見るところ、晩年のホルクハイマーの哲学はそういう状態にある。あるいは、他方で批判的理論は、ニーチェに対してしかるべき距離を保たないと、ポスト構造主義的な唯美主義と非合理主義に、致命的なほど近づくことになる。ハーバーマスは、そこにアドルノ晩年の哲学の危険を見る。しかしラートは、『近代の哲学的ディスクルス』に対しては、ニーチェを除外することで、哲学的自己批判の衝動といったものが失われはしないか、また哲学的反省の文学的形式への尊重が欠けると「哲学のすかし」⁵³が消滅しはしないか、といった問いが残っていることも指摘している。

Ⅲ 「言語」と「自然」の問題系

政治経済学批判に基づく批判的理論のプロジェクトの挫折を受けて、ホルクハイマーは『啓蒙の弁証法』で、「主体の内での自然の想起」という合理性基準を提出する。彼の人間学的思想にとっても重要なこの視座は、ひとつの言語哲学的な考察方法と、「自然」の問題系を含んでいる。しかしこの両者とも、30年代のホルクハイマーには、潜在的に存在したとしても、しかし明確には論じられることのないものだった。この彼の「転回」にアドルノの影響があったことは確かと思われるが、それを具体的に規定する作業はいまだに一つの課題であり続けている。『ホルクハイマー著作集』に公表された二人の討論の記録⁵⁴は、先にニーチェ受容の違いにも現れた両者の思考様式の違い⁵⁵も含めて、この作業に重要な資料を提供しているが、筆者にはこうした作業の前提として、アドルノがそれに従っているベンヤミンの理論の特徴を明らかにしておく必要があると思える。メニングハウスの優れたベンヤミン研究⁵⁶を検討することで、その独特な言語哲学的考察方法を理解することは、初期アドルノの綱領的論文の理解、さらにはアドルノのハイデッガー批判の一端を理解す

ることにつながるであろう。そしてそれは、ホルクハイマーとの比較の可能性を拓き、またアドルノの「自然史」の視座に対するホルクハイマーの態度⁵⁷理解のための導入としての役割も果たすであろう。

メニングハウスのベンヤミン研究は、ベンヤミンの仕事、神秘主義的・神学的な言語考察を世俗化させながら我がものとする、ハーマンやフンボルトのような人、同様に彼らを「われわれに」紹介する初期ロマン主義者たちの持っていた真の言語哲学的志向を継承するものと捉える視点に立ち、そしてその際、中心となる概念を「言語の魔力 [Sprachmagie]」についての発言に置く。ベンヤミンにとって言語理論の「根源的問題」は、言語の魔力、すなわち「言語の領域」における非常に特殊な表現力だったのであり、したがってメニングハウスは、ベンヤミンによるこの概念の設定および展開を軸として、ベンヤミンの研究に統一的な解釈を与えようとするのである。研究の全体は三部から構成され、第一部では、ベンヤミンの言語に関する綱領的諸論文⁵⁸を考察することで、ベンヤミンのいわば理論的言語哲学を解明し、次いで第二部では、それを基礎にいわば実践的言語哲学 - バロック悲劇の理論とボードレールにおけるアレゴリー的形式の解釈 - が呈示され、そして第三部では、言語神秘主義と日常言語の哲学との関係についての、ひとつの歴史哲学的考察が行われている。本稿では、メニングハウスに従って、第一部について、言語の魔力とは何を意味し、そしてそれを捉えるためにどのような方法が用いられているかを検討し、そして第二部については、両研究の構造について、ごく簡単に言及することにしたい。

言語についての綱領的論文。メニングハウスによると、ベンヤミンの1916年の論文「言語一般および人間の言語について」⁵⁹は、ベンヤミンの初期の著作そのものとも言えるもので、その後もその基礎となる「力」を保ちつつ、ベンヤミンの多くの著作の中心に置かれた出発点および目標点をなすことになった。以下では、メニングハウスがこの論文に識別・検討する三つの問題複合体 - 言語のある特殊な「直接性」としての「魔力」、「翻訳」の理論 (= 「具体的な言語要素」)、 「抽象的な言語要素」(「語」、「記号 [Zeichen]」、 「判断 [判決]」) の理論 - に、主として「翻訳」の理論の展開と考えられる論文「翻訳者の使命」および「類似するものについての説」、「模倣の能力について」での説明を付け加える形で、先に設定した課題を追求して行きたい。⁶⁰

メニングハウスによるベンヤミン理論の再構成は、言語における「語の内容」と「精神的本質」という二

つの側面を区別し、その後者を「言語の魔力」理論として明らかにした上で、この両側面の関係の視点から、魔力を捉える独特な方法、および具体的な言語形態の分析の解明へ、という順で行われる。

ベンヤミンの論文の最初には次の文章が置かれている。「人間の精神生活のあらゆる表出は、一種の言語として把握されることが可能で、そしてこの把握は、[そこで用いられる]ひとつの真の方法のあり方に従い、至るところで新しい問題設定[の可能性]を拓く。音楽の言語、彫刻の言語について論じることができるし、ドイツあるいはイギリスの判決がそれで起草されている、[ドイツ語あるいは英語という]そういう言語とは直接関わりのない司法の言語について、技術者の専門用語ではない、技術の言語のようなものについて論じることができる。」⁶¹ メニングハウスはこの文章を、以下での概念的展開の前提および「対象」をなす仮定的把握を際立たせているものとする。彼はこの「対象」を、問いの形で次のように定式化する。話すということの第一次的データとは「直接関わりのない」ような言語、むしろ「言語の言語」のようなものと呼ばれ得るような言語(その際、「属格は、手段関係ではなく、媒体[媒質 Medium] 関係を示す」)、そうした言語の概念はどのように理解されるのだろうか、と。

「一体、言語は何を伝達するのだろうか」、メニングハウスによると、この問いに解答を与えることは直接、ベンヤミンの言語哲学の中心へと導く。ベンヤミンはいう、「言語は、言語に相応した精神的本質を伝達する。重要なことは、この精神的本質が伝達されるのは、言語において[in der Sprache]であって、言語によって[durch die Sprache]ではない、ということを知ることである。」⁶² メニングハウスは、「語の内容」によって示されることなしに、しかしそのものとしての言語において実現される形式的「原理」、単なる形式的な規則体系ではないが、同時にひとつの独自の[sui generis]「内容」、「精神的本質」を「伝達する」形式的原理 - この独特な「原理」が、ベンヤミンの熟考が対象とする言語の特殊な伝達である、と敷衍する。そしてより狭い意味での記号論的諸規定には、次のような形而上学的な根本的仮定のヒエラルヒーが前提になっているとする。

1. あらゆる人間、いや「あらゆる出来事や事柄」、あらゆる仕事[Werk]には、特有の「精神的本質」がある。2. あらゆる「精神的本質」は、そもそも「伝達可能」であるべきなら、「表現」における「直接的」容貌[表情 Physiognomie]として伝達される。3. この種のあらゆる「表現」-価値 - すなわち単に音声言語

だけでなく - は、「一種の言語として把握される」 - それによって言語という語が、ひとつの「隠喩」へと蒸発してしまうことなしに - ことが可能である。4. この種の「表現」-論理の意味での言語は、単に「精神的な本質において伝達可能なもの」を『現れ』させるだけでなく、むしろそれはそれ自身、その顕現からまったく分離できない「精神的本質」である。⁶³

そしてメニングハウスは、言語の「語の内容」と「精神的本質」との根本的区別についてのパラダイムとして、「口調[Ton]」、「文体」、「言語形式」を挙げている。「口調」は、皮肉な口調の例が示し、「語はひとつの感情的色合いを帯びている、という公式で表現される」経験が言うように、それ自体においてあるものを実現しており、またメニングハウスによると、ベンヤミンは文体现象に、ある著者の個人心理学的本質ではなく、芸術的創作と歴史的経験とのひとつのコミュニケーションの、表現であり主導者である、「精神的本質」を突き止めている。言語形式については、後に見るように、アレゴリー的な意味すること[Bedeutend]の様式がそれ自体で「表現」する「内容」を(再)構成する、パロック悲劇の研究が中心的に扱っている。すなわち、メニングハウスによるなら、言語はそのものとして、その内的形式においてそれ自身で、ひとつの独特な『内容』を経験可能とする限り、「言語の言語」について論じることができる。『第二の』言語、これがベンヤミンの「対象」であり、「伝達」の過程で『第一次的な』意味論は、たしかに不可欠ではあるが、しかし一つの基礎にすぎないこととなる。

さて、われわれはここで、メニングハウスに従って、言語の魔力の概念を規定しておこう。彼はベンヤミンからの引用を交えて以下のように言う。内容の運送手段としてではなく、ある「精神的本質」が現れる非-間接的[un-mittelbar]媒体[媒質]として理解された言語は、「それ自体において自己を」伝達し、「最も純粹な意味で伝達の『媒体[媒質]』であり、...この直接性を魔力的というなら、言語の根源的問題とは、その魔力である」、と。⁶⁴ すなわち、彼によると、(言語)-「魔力」の概念は、媒体[媒質]の概念に媒介されて、言語的「直接性」の一つの特殊な形式と同一視されている。この「直接性」の概念は、言語におけるある「精神的本質」の「伝達」の仕方を、道具的=間接的[mittel-bar]表示(再-呈示[Re-Präsentation])という伝統的概念に対して際立たせる - それは「語の内容」とはカテゴリー上異なるものを現れさせる - と同時に、媒体[媒質]の概念は、オカルティズムの実践の言語領域への述語的な残響と共鳴を実現している。

すなわち、メニングハウスによると、媒体〔媒質〕という語の一般に用いられているパラダイムは、自然科学からコミュニケーション論を経て心霊術の「霊媒」にまで及んでいる、つまり媒体〔媒質〕という語は暗に、「魔力」の概念のなかで明確に交差し、そして互いにとって機能化されている経験領域と同一の両極端を含んでいる。「魔力」の概念は本来、太古のオカルト的、排他的な実践領域と関連し、そこではそれは、直接、とはつまり、技術的理性の道具的な目的-手段-関係で理解することのできないものとして、現実的影響力のあるような力の実現形式を意味している。ベンヤミンは、「オカルト的知識の領域」に、日常的な「感知する世界〔Merkwelt〕」や、とりわけ言語のパラダイムを発見するために、直接かつ非隠喩的に、その知識の領域の究明と取り組んだ。メニングハウスは、測りがたいものを日常的なものとして認識するような弁証法的光学、そうした「弁証法的交差」が、ベンヤミンによる言語の魔力的側面の究明を導いているのだとしている。⁶⁵

これに続いてメニングハウスは、他の二つの魔力的伝達の最高形態の、非神秘主義的『理性』を手に入れようとするベンヤミンの努力を追求する。まず、メニングハウスは、ベンヤミンは「名」の神秘的概念に表われている言語経験の重要性を、「名指されるもの」の「魔力的〔魔術的〕」超越にみている、とする。話すことの魔力的な力は、「事物の名によって」実現されるのではなく、むしろ命名の神秘的「意味」は「唯一」、命名の「外延的全体性」（事物の伝達）に同時に、言語そのものの「内包的全体性」が現れる、というところにある。その意味で、名は、言語の言語と呼ぶことができる（もしも属格が、手段関係ではなく、媒体〔媒質〕関係を表わすならば）わけである。次に啓示の概念について、メニングハウスは次のようにまとめている。その概念は、どんなに偽装されていようとも、定式化されたもののなかには定式化されていない力が、述べられたもののなかには述べられていないもの、それどころか述語的言明としてはしばしば「言い表わし得ないもの」が直接＝「魔力的に」現れているという経験の反映として理解される、と。⁶⁶

さて、以上のような論文の第一の体系的な部分には、「翻訳」の理論と「抽象的言語要素」の理論という二つの部分が続くわけだが、それは、メニングハウスによると、第一の部分の展開として理解される。まず「翻訳」の理論についてであるが、ベンヤミンは翻訳概念をどのように位置づけているのか。メニングハウスによると、その際のベンヤミンの問いは、言語の魔力の「基礎」、いわゆる「事物の名づけ」のそれに固有の性

質への問いであり、それは、創世記からひとつの言語哲学的パラダイムを取り出すという仕方では答えられる。

彼によると、創世記がベンヤミンに言語哲学的関心を起こさせるデータは、「創造行為の初めと終わり」にある。⁶⁷ すなわち、絶対的に創造的なもの「在れ〔生れ〕」と、-「神は造られた〔創造された〕」のもう一方の側面での-解放された創造の神の言語への『取り戻し』（「彼は名づけた」）である。『神の言語』のこの両極-言語的定立の絶対的自発性と、自らが創造した事物の命名の絶対的「同化」＝「客観性」-をベンヤミンは、「語〔言葉Wort〕」と「名」と呼ぶ。神の言語においては、これらの「言語要素」は、そのつど絶対的な『純粹性』をもって分極化していると同時に、しかし「在れ〔生れ〕」に媒介されて、まさにその極端さにおいて同一である、ないし同一の事態の二つの側面にすぎない。この神の言語と比較すると、直接的に「創造的でない」人間の言語の持つ自発性と主体性は、「条件付けられた分析的な本質」、つまり「語の名への反映」でしかなく、また人間の「命名」の客観性も、「絶対的に無条件的なもの」ではない。

メニングハウスによると、この彫琢の結論は次のことにある。すなわち、人間の言語には、「名」と「語」の契機、「受胎と自発性」の契機があり、それは神の言語においては、どのつど絶対的に、純粹に、しかしその両極性のなかでいわば合同に、とはつまり、いつも同時的で比較的交差した形でのみ現れるべきものである、ということである。⁶⁸ 人間の言語においてはいつも同時にかつ条件付きで、主体的に定立する契機と一種の受容的な（「受胎するような部分」）契機とが働いているという認識は、ベンヤミンの翻訳概念へと導く。「しかし言語は、この無比の結びつきという点では言語の領域にのみ見いだされるような、受胎にして同時に自発性であるものを言い表わすのに、それ自身の言葉を持っている。…（それは）翻訳の概念である。」⁶⁹

このようにベンヤミンにあって「翻訳」概念は、言語一般の総括概念となるが、しかしメニングハウスもいうように、1916年論文ではその概念は説明不十分な状態にあり、その一層の展開は、「具体的な言語要素」の理論を発展させる後の言語論文を俟たなければならなかった。そこへの橋渡しとしてメニングハウスが着目するのは、「名」の概念の具体化である。彼によると、「名」の概念は、「人間の言語」と「事物の言語」とのひとつの特殊な関係の総括概念となる。⁷⁰ 彼の見るところ、「名」の理論として定式化された思想は、描写方法からみると、「魔力」理論と「翻訳」理論との間の一種のつなぎ目であるのと同様、中心となる事柄からする

と、それらの交差となっている。すなわち、一方で「命名」は、「事物の言語の翻訳」、すなわち『話されるもの』の部分的に非-任意的な構成を意味する。他方でそれは同時に - そしてまさに『事物に名づけるなかで』 - 「言語自体の最も内的な本質」、すなわち『話されるもの』の「魔力的」超越を表現すべきである。メニングハウスは、名という神秘的-神学的トポスにおいて、ベンヤミンの再解釈では言語的「直接性」の二つの形態 - 「言語」と「事物」との間の「外延的」[直接性]と、そのものとしての言語の運動の「原理」と「話すこと」ないし芸術作品の「本質」との間の「内包的」[直接性] - が「頂点に達する」と言っている。

さて、メニングハウスによると、エッセイ「翻訳者の使命」は、二つの点で「具体的言語要素」の理論を発展させていると考えられる。ベンヤミンにとって、言語の「語の内容」と「精神的本質」との区別に対応して、異なる言語の内的「親縁性」への志向と、意味の「漠然とした類似性」の断念とは、ひとつの前提に属するとすると、異なる言語の「親縁性」はどこにあり、その技術的な実現様式はどのようなものなのか、という問いが提出される。この問いに対してベンヤミンは、「純粹言語」という考え方、そして翻訳の叙述様式と技術の説明で答える。

ベンヤミンが純粹言語の概念で考えていることを、メニングハウスは次のようにまとめている。話すことは、その「精神的本質」、その「意味する仕方」を、余すところなく完璧に意味されるものに刻印することはできない、すなわち「完全には」その「実現の領域」に入らないため、話すことの歴史的-事象的形態は常に、その「志向」の「断片」にすぎないものにとどまり、それゆえ「補完」の能力がある、いやそれを必要とする。換言すると、翻訳は、- 言語の絶対的な媒体[媒質]性という仮定された理念で測ると - 「断片」とどまる原文の言語に、ある他の言語からの親縁性のある「断片」を付け加え、「そうして両者を、ある器の断片としての残骸のように、あるより大きな言語の断片として認識可能にしようとする。」すなわち、翻訳は、そこで「意味する仕方」自体が唯一の「意味されるもの」となるがゆえに、諸言語の「純粹言語」への「補完」に従事する、というわけである。

それに補足してメニングハウスは、(神的)言語の(臆測上)根源的な統一と非-任意的な妥当性を持つ言語状態を際立たせる「聖なるテキスト」の概念に言及する。彼によると、「聖なるテキスト」のそうした言語性は、人間の記憶の及ばない定立であるのと同様、ベンヤミンの定義では、諸言語の任意的数多性 (= 反定

立)から「純粹[言語]」へと脱すべき翻訳の「役割」にとって、得ようと努力される総合でもある。そのように理解されると、翻訳という言語的行為は、ひとつの墮罪の『裏返し』である(救済)史的行為 - 言語目的論と歴史目的論との交差 - に関与する、ということになるわけである。そして異なる言語の「親縁性」と翻訳の関係について、メニングハウスは次のようにまとめている。さまざまな個別的言語の「意味する仕方」は、それら「相互の関係」のなかに同時に、「すべての可能な言語総体」を現れさせる。「真の翻訳は、光を通す[durchscheinend]。それは原文を覆い隠したり、その邪魔をしたりせず、純粹言語を、それ自身の媒体[媒質]によって強化されて、逆にますます一層完全に、原文へと差し込ませる。」「だから翻訳は結局、諸言語相互の最も内的な関係の表現に対して役に立つ」と。⁷¹

では、そうした翻訳の叙述様式と技術とはどのようなものなのか。この問いは、論文「類似するものについての説」および「模倣の能力について」での類似のテーマとも関連する。⁷²「翻訳者の使命」で言われているのは、さまざまな「意味する仕方」は、「決して比較的独立した状態で見いだされるのではなく」、「炎に似て、一種の担い手(まさにそのときに「意味されるもの」、メニングハウスによる挿入)に即してのみ現れる。」それゆえ翻訳も、その「最も内的な関係」を直接的に「言明」へともたすことはできず、再び間接的かつ内包的にのみ、「叙述」にもたすことができる、ということである。模倣の能力を扱った後の二つの論文では、このことは、無意識の判じ絵としての文字、言語における「観相学的諸力」への反省として問題となる。メニングハウスは、ベンヤミンはここで、非-模倣的なミメーシス概念⁷³のなかで、受容的な契機(「描写」と創造的な契機(「表現」とを交差させている - それは「翻訳」理論の直接的な、ただ普遍化されているような再定式化である - とし、無意識の判じ絵としての文字ということについて、ベンヤミンから以下の引用を行っている。

「むしろ言語のすべての模倣的なものは、そもそもその基礎として何か疎遠なもの、まさに言語の記号的なもの、伝達的なものに即してのみ現れることのできるような、基礎づけられた志向である。だから聖書の文字通りのテキストは、唯一そこでのみ判じ絵が形成されることのできる、基礎である。」「だから、語あるいは文の意味連関は、それに即してはじめて、稲妻のように類似性が現れる、担い手である。」⁷⁴メニングハウスによると、ある作品の「事実的内容」の「焼失」のなかで、その作品の「真理内容」が「出現する」と

いう、ベンヤミンの芸術哲学的理論は、ここにその言語哲学的基礎を見いだす。すなわち、「記号論的担い手」に即して、ある「模倣的なもの」が「稲妻のように」、ないし「炎のように」「出現する」という理論にである。メニングハウスは言う、ベンヤミンにとって「語ないし文の意味連関」は、それ自体が音声の模倣的相関概念であるのではなく、音声と意味連関の両者は、第三者的なもの、すなわちそのものとしての、また全体としての言語形態のなかで模倣的に、その言語形態を刻印づける「諸力」を表現するような「類似性」にあって、それ自体は圧倒的に非模倣的-記号論的な「基礎」、「一種の担い手」である、と。こうした「諸力」の「叙述」ということに関しては、後に「パロック悲劇」研究への「認識論的序章」で、初期の理論を理念説として再構成するなかで、布置、モザイク技術といった概念によって一層の説明が与えられることになる。⁷⁵

さて、初期の言語論文では、以上のような「具体的な言語要素」の理論に加えて「抽象的な言語要素」が論じられている。メニングハウスによると、ここではベンヤミンは墮罪の物語の解釈⁷⁶を通じて、「名」における翻訳の理論では見いだされないような「言語要素」、すなわち任意的な「語」、「単なる記号」、外面的な「判決[判断]」にも、同じように言語の魔力を発見し、そしてそれは、ベンヤミンによる具体的な言語形態の分析、すなわちアレゴリー的形式の分析へと繋がって行く。まず、メニングハウスは、墮罪の物語が持つ「三重の意味」を述べたベンヤミンのテキストを引用する。

「...人間は、名という純粋な言語の外へ歩み出ること、言語を手段とし、...それによってまた言語を、ある部分では少なくとも、単なる記号にする。...第二の意味は、いまや墮罪から、墮罪において損なわれた名の直接性の回復として、ひとつの新しい直接性、すなわちもはや至福の状態ですらに休らうことのない、判決の魔力が生じる。第三の意味は、おそらく敢えてこう推測してもよいだろうが、言語精神のひとつの能力としての抽象化の根源もまた、墮罪のうちに求められるだろう、ということである。すなわち、善と悪は、名づけ得ぬものとして、名を欠くものとして、人間がまさにこの[善悪の決定という]問題設定の深淵のなかでそこから離れる名言語の、その外部に在るからである。しかしいまでは名は、現存する言語に関しては、その言語の具体的な要素[エレメント]がそこに根差している、その根底を提供するだけである。しかし抽象的な言語要素は、...裁く言葉、判決のうちに根差している。」⁷⁷

以上のテキストに対して、メニングハウスはおおよ

そ次のような世俗的言語への「翻訳」を行う。

a) ベンヤミンは、墮罪の再解釈によって、「名」における「翻訳」ではないような「言語要素」を導入する - というのも、蛇が善についての知識と同時に[与えることを]約束する「悪についての知識」は、まさに樂園というよき創造のなかでは、「翻訳」されなければならないだろう「対象を持たない」からである。同時にこの言語要素は、神の言葉の瞬間的な実践的主体性を意のままにすることもできない、しかしおそらくそれは、神の言葉の「パロディー」である。すなわちそれは、根底から任意的(『自発的』)で、外的に伝達する「人間の言葉」、「単なる記号」である。

b) 樂園の創造のなかの「名の純粋性」を「傷つける」、任意的な「人間の言葉」は、「最初の人間を樂園から追放し」、そしてその限りで「直接的」=「魔力的な」影響力を行使する、すなわち「判決の魔力」である、神の「裁く言葉」を「切除する[exzistieren]」さて、神の「判決」のこの文字通りの「魔力」は、それ自体でとれば上辺だけであると同様強制的な「論証」によって、隠喩的な言語-「魔力」として、「人間の言葉」の理論にも持ち込まれる。なぜなら、明らかに任意的な「人間の言葉」と神の「裁く言葉」は、墮罪においては直接関連しているため、人間の言語の「抽象的な言語要素」についても即座に遡及的に、こう言われるからである。「しかし抽象的な言語要素は、- おそらくこう推測してもよいだろうが - 裁く言葉に、判決に根差している。」⁷⁸

そしてメニングハウスは、「抽象的な言語要素」にも特殊な「魔力」を見いだす、言語についてのベンヤミンの経験を指摘する。それはすなわち、アレゴリーの抽象的な任意性である。彼によると、アレゴリーは、その任意性にも拘わらず、「表示[Bezeichnung]」の単なる一方法」にすぎないのではなく、それ自体でまた直接、ひとつの非-道具的「表現」を実現する(「抽象的な言語要素」も持つ、ひとつの特殊な「魔力」についての議論は、まさにこのことを意味する)ということとは、ベンヤミンの種々のアレゴリー理論の中心部分であるからである。

c) ひとつの言語形態とひとつの『歴史』形態との間には、範例的相関関係がある。メニングハウスの言うように、ベンヤミンは後に、パロック・アレゴリーの「根源」を、パロック時代の「宗教政治的な」布置 - 中心的資料と見なされるのは、救いの確かさの問題化とこの世の「はかなさ」の真剣な経験である - のなかに突きとめているが、ボードレールのアレゴリー的表現法の解釈には、言語的抽象化と『現実的』抽象化との

(象徴的) 相関関係が見いだされる。ベンヤミンはこう言っている。「アレゴリー的なものの見方はいつも、無価値にされた現象界の上に築かれている。商品に含まれている、事物の世界の特殊な無価値化が、ボードレールにあってのアレゴリー的志向の基礎である。」⁷⁹ メニングハウスは、墮罪の物語の再解釈は、おそらく悲劇-アレゴリーと取り組むなかで漠然と把握された「推測」、すなわち(批判的な)言語的布置と、(危機的な)歴史的布置との間の関連を、ひとつの概念的パラダイムに持ち込もうとするような、最初の試みであると言っている。

以上、メニングハウスによるベンヤミンの「理論的」言語哲学の分析を追究してきた。その理論は、言語の「語の内容」と「精神的本質」との区別を基礎に、後者を言語の魔力と捉える視点から、それをまず「具体的な言語要素」の理論で、すなわち「翻訳」の理論、とりわけ「名」の理論において展開し、さらには両者の関係の点から独特なミメシスの理論 - とりわけ無意識の判じ絵としての文字という方法的視点 - を提出し、さらにその魔力を「抽象的な言語要素」の理論にも見いだすものだった。この後者、とりわけアレゴリー的任意性の特殊な「本質」、その非-任意的な「表現」の問題は、ベンヤミンの具体的な言語形態の分析へと繋がってゆくものである。以下では、ベンヤミンによる二つの言語形態研究に対するメニングハウスの分析に、その構造に限定してごく簡単に触れておきたい。

具体的な言語形態の分析。まずは『バロック悲劇の理論』であるが、メニングハウスによると、その冒頭におかれた「認識批判的序章」は、初期の言語論文に理念説として手を加えたもので、いわば初期論文の第二段階をなすものであった。⁸⁰ ここでは、言語の「精神的本質」と「語の内容」は、「構成的理念」と「現象」と言い換えられ、そして理念と現象の関係については、理念は言語的要素の布置、配置として叙述される⁸¹、とされる。その際、この言語的要素は概念によって確定される、すなわち概念は、現象の救済と理念の叙述を担うものとされ、そして叙述は、概念的「分割」と、中断および断続的リズム法に基づく「考察の段階」を経て行われる。概念的「分割」と「考察の段階」は、モザイク部分のように設定され、叙述はそれを嵌め込んでゆくわけだが、それは叙述されるものの存在形式のミメシスをなし、その結果としての非-加法的全体から、「象徴」としての言葉、理念の「名」が輝き出る、というわけである。

さて、メニングハウスによると、『バロック悲劇の理論』はこの視点、方法を実践しており、そしてそれは、

三つのモザイクからなる。⁸² まず最初に、ベンヤミンは、中心的な「劇作技法上の事実」を政治的-人間学的に記述することを手掛かりに、バロック悲劇の内容的『プロット』の「類型学」を展開する。専制君主劇、その補足としての殉教者劇 - それは専制君主の広範囲にわたる「決断無能力」、「支配者としての権力と支配能力との相反的關係」、そして最後に君主の「恐ろしい最期」といったことを特徴とする - 、さらに廷臣という形態の分析を、その時どきに「時代」の「神学的」ないし「宗教政治的」布置に関連させながら、ベンヤミンは次のことを示す、とメニングハウスは指摘する。すなわち、苦しみに満ちた『人事のはかなさ』を神の救済計画に信心深く組み入れること、この世の「聖寵の状態」への信頼は、バロック時代には広範囲にわたり失われるに至っており、むしろこの時代は、自分自身に委ねられた「被造物」、どんな超越的「恩寵」によっても直接その救いが保証されていない「被造物」として、自己を認識する - しかし、それにも拘わらずそれは、あるいはまさにそれゆえ、恩寵から遠く離れた此岸にどっぷりとつかるといふ「回り道をして」、「超越を...確認しよう」と「努める」、ということである。

その後で、これらの「劇作技法上の事実」に対する「注釈」として、「バロック・メランコリー」(「悲しみ」)の歴史的特徴および現象学的構造が規定される。ここでは、行為の、すなわち事物と人間に対する「能産的關係」の「無価値化」へのひとつの反動形成が、「悲しみ」の特殊な形式として歴史的に規定され、その「現象学的」分析の後、先の『プロット』の記述をメランコリー概念の回りに配置する形で思弁的に再構成することが行われる。王侯は、メランコリーに陥った者の範例であり、ベンヤミンのバロック・メランコリーの理論は、『無価値化』と『高揚』との緊張、移ろいやすく『空虚な世界』への沈潜と、形而上学的『救済』への内在的『急変』との緊張という弁証法を概念化する、とメニングハウスは言う。

そして最後に、- 内容の「類型学」および「注釈」の演繹的ないし帰納的延長によってではないが、しかしおそらく[相互に]際立つ、「断続的なりズム法」で行われる、異なる「意味段階」での「動機の反復」によって - バロックの悲しみ(メランコリー)は、アレゴリー的言語形式の「母であり内容」として、したがってこのアレゴリー的言語形式は、バロック悲劇のテーマの理想的な「表現」として証明される。すなわち、「あらゆる種類の変容」、「恣意」という形態での「抽象」と「主観性」が、アレゴリー形成の「本領」であり「図式」だが、ベンヤミンはその内容として、『無価値

化』 - だから廃墟が、アレゴリー的形式の最も具体的なパラダイムであり、同時に『人事のはかなさ』、つまり悲劇のひとつの比喻像としての歴史の觀念の最も具体的なパラダイムでもあり、そして屍体が、破壊的な変容の典型であることになる - と『救い』の弁証法を見いだす。バロック悲劇では至るところで、アレゴリーの変容が、「恣意」として、「知識の力の劇的な表明」として、「事物の後宮のなかの陰鬱なサルタン」として、支配している - しかしそれは、熱狂的興奮のメカニズム、とはつまり、禍に浸りきることはその重苦しい頑なさのなかで、それ自身を「ぼろくそにやっつけ」、そしてその反対物へと豹変する、ということに伴う。ここにメニングハウスは、「アレゴリー的なもののアンチノミー」を見いだすわけである。

以上の考察に、比喻[像]と意味とのアレゴリー的隔たり[深淵]を自己の言語哲学の概念的視野から解釈することを加えると、悲しみをバロック・アレゴリーそのものの図式に言語哲学的に突きとめるというベンヤミンの企ての全貌が現れる。すなわち、バロック悲劇の媒体[媒質]である抽象的-アレゴリーの言語は、その劇の登場人物たちをいま一度、楽園の「恩寵の状態」の彼岸にいる「墜ちた被造物」として認識させる。それに従うと、墜ちた被造物の墜ちた言語として、抽象的-主観的意味作用はそれ自身、「計画的に」組み入れられた「表現」、つまり「被造物の自由で根源的な発言」の欠落の表現だったことになる。生氣ある音声による浄化を欠いた比喻言語 - 「自由な表出」の「悲しみにあふれた」塞き止めとしての「飾り立てた誇張表現」ともいわれる - 、この音声と意味との隔たり[深淵]のなかで「引き裂かれた...言語の深み」への反省によって、悲しきは「アレゴリーの母であると同時にその内容」であるというベンヤミンのテーゼは、少なくとも裏づけられていると、メニングハウスは言っている。

以上のように、メニングハウスはベンヤミンの『バロック悲劇の理論』を、バロック悲劇-プロットの類型学(劇作技法上の事実の相反性)、そこで『支配的な気分状態』の注釈(メランコリー、つまり『悲しみの法則』の弁証法)、題材的なテーマの『同化』ないし非-有意的な実現(表現)としての形式の理論(アレゴリー的なもののアンチノミー)の三つの考察段階から再構成する。各段階は、観点を加えてゆくのではなく、「モチーフ」を素材的に[stofflich]移し替えて「反復」することで、解釈の『弁証法』の全体を展開する。その全体から、バロック悲劇は歴史を悲劇として、したがって「人事のはかなさ」を描く、それは悲しいこと

についての悲しみの劇である、というバロック悲劇の自己定義が、アレゴリー的言語形式の「表現」として解明されることになるのである。⁸³

次に、『ボードレールにおけるアレゴリー的形式の解釈』についてであるが、メニングハウスによると、パサージュ論のミニアチュア・モデルとしてのこの研究は未完成に終わっているが、完成稿の存在する第二部⁸⁴や、残された断章から推論すると、それは『バロック悲劇研究』と同じく三部構成からなり、第一部、「問題」としてのアレゴリーは問題の提起を行い、第二部は問題の吟味のための資料を提出し、そして第三部は、問題の「解決」を提出することになっていた。以下では、『バロック悲劇研究』の構成を念頭に、メニングハウスによるベンヤミンの『ボードレール研究』再構成の試みに、ごく簡単に言及しておきたい。⁸⁵

メニングハウスによると、このプロジェクトの第一部は、ボードレールのアレゴリー的表現法の実在性と美的特殊性を、さらに続く解釈の「問題」として際立たせるべきものだった。彼によると、例えば死、想起、時、後悔、害悪といった言葉のアレゴリー的誇張は、その意味作用の重力⁸⁶によって、詩的につくられた『像』の繊細な仮象のなかに、ひとつの抽象の裂け目を入れる。この「仮象と意味とのアンチノミー」という、ボードレールの作品のなかの「根本的逆説性」、ボードレールが主として、あらゆる種類のにおいと陶醉状態に対する彼の感受性と想起の能力とによって解明したような「万物照応の理論」と、アレゴリー的抽象のなかに存在するような、この準-模倣的な『呼応』の拒否「との間の矛盾」 - それは「理想」と「憂鬱」との対比に対応する - をベンヤミンは、解釈を深めるべき問題として説明しようとした、とメニングハウスは言っている。⁸⁷

第二部は、ボードレールの「アレゴリー的天才」の解読および社会理論的基礎づけを企てる。メニングハウスによると、この企ては、大都市、その要素としての群衆、労働と無為における『モデルネの』(時間-)経験の構造(後者は遊歩者と賭博者のひとつの類型学に即して叙述される)というモチーフの展開によって追究される。よく知られているように、大都市およびその要素としての群衆では、ある「耳を聳するばかりにわめいている街路」にいるある「通行人」によって与えられる一瞬の魅惑 - こうした文脈と行為形式では、愛の「理想」はある一瞬の「憂鬱」に、字義通りの意味でも比喩的な意味でも「過ぎ去る」痙攣になる - 、このメランコリー的であると同時に快樂に満ちた「ショックの形象」が、大都市の経験の隠れた形象のパラ

タイム⁸⁸であり、そしてそれは、ショック-体験の消化形式としての意識的「追想」と、時間を満たすような「経験」のモデルとしての無意識的「想起」という「記憶の構造」の対極化に導く。メニングハウスによると、コンティジェントなショックの連続への時間の分裂⁸⁹は、その時どきの『内容』に対する無関心として時間経験の質の除去と密接に関連し、そのことが市民的な無為を具現する三つの類型-遊歩者、賭博者、研究者-と、自動機械を扱う労働者に通有の時間-体験をなす。

このようにボードレールの作品のなかの「根本的な逆説性」が、経験と(ショック-)体験、記憶と追想、満たされ時間と抽象的な時間-時間知覚の抽象性が、憂鬱といわれるものの基礎であり、倦怠とは、空虚に過ぎ去る時間への倦怠にほかならない-という両極に集められた後、それらは理想と憂鬱という概念のもとにまとめられる。ここでメニングハウスが指摘するのは、論文「ボードレールにおける幾つかの概念」では、理想の症候学は、アウラの万物照応という芸術哲学的概念-香り、色、音が互いに答え合うことが、万物照応のモデルである-に移行させられる一方、憂鬱のコンプレックスには、美的形式概念へのそうした分類が完全に欠落しているということである。彼の考えでは、いうまでもなくこの芸術哲学的空位を埋めるのは、アレゴリー的形式の理論であり、そしてそこへの移行にとって媒介項となるのは、ボードレールの「メランコリーの天才」の規定である。⁹⁰

メニングハウスは、ボードレールから次の引用を行っている。「アレゴリーの志向の威厳。有機的なもの、生あるものの破壊-仮象[偽りの輝き]の消去。...仮象の欠如とアウラの凋落とは同一の現象である。ボードレールはアレゴリーの技法をそのために用いる。」⁹¹

そしてメニングハウスは、このプロジェクトの未完成に終わった第三部は、外見上はまったく乖離したモチーフ研究と「ばらばらの形式分析とが...統一的連関(を形成する)」はずだったのであり、この構成の収斂点は、『悪の華』の内容の予定された叙述形式として、アレゴリーを指示しているとする。そして今回は、先行する部の『核心』は、再びひとつの「自立的なモチーフ圏」に即して、すなわち売春婦の形象に即して叙述されるはずだった、と続ける。「魂の抜けた、しかし依然として快楽に奉仕する肉体において、アレゴリーと商品が結婚する。」⁹²メニングハウスによると、ベンヤミンのボードレール-書は、売春婦における快楽、商品形式、憂鬱、そしてアレゴリーの模範的な『結婚』を、その対象へのミメシスのなかで、明らかに「叙

述」と「構成」によって捉えようとした。最後に彼のまとめを引用しておこう。

彼はいう、商業的な調整の介入のもとでの都市の風景の移ろいやすさ⁹³、密集した顧客の流れのなかでの通行人のショック体験、産業の賃金労働者および小市民的無為における時間知覚の悪しき無限、質を除去された経験の結果としての憂鬱、享楽の分野へのその取り入れとしての遊歩⁹⁴、情熱の分野でのその理想化としての英雄的行為⁹⁵-これらすべてのモチーフは、ボードレールにとって中心的な、商品形式のなかでの「人間の環境の無価値化」の具現としての売春婦というモチーフの回りに集められ、そしてこの「人間となったアレゴリー」というプリズム的形式で、さらに別の仕方でも形式理論と「結婚させ」られる。だからその場合、ボードレール-書の第三部は、二重のストレットのような仕方でも、第二部の乖離したモチーフを、そのときに個別的なものとしても、娼婦の像でのそれらの動機的な布置においても、商品とアレゴリーとの平衡に導くことになったであろう、と。⁹⁶

以上、メニングハウスの優れた研究に従って、ベンヤミンの(理論的、実践的)言語哲学の内容を検討してきた。この作業を踏まえて次に、ベンヤミンの理論のアドルノに対する影響を、初期アドルノの綱領的論文のなかを探ってみたい。筆者のみるところ、『アドルノ著作集』の第一巻に収められた、初期アドルノの三つの綱領的論文⁹⁷は、ベンヤミンが道を拓いた「言語の墮罪と救済」とでも表現すべきモチーフを、独自に展開しようとする試みとして理解できる。それは、一方で「存在論」の崩壊という事態を経験した哲学の現状を踏まえてそこからの脱出口を探り、他方でその場合の哲学の言語とはどのようなものなのかを明らかにし、そしてそれと同時に「自然史」の理念という、ひとつの歴史哲学の構想を提出する。以下では、これらの試みの構図だけを見ておくことにしたい。

論文「哲学の今日的意義」は、一方の観念論の危機という事態と、他方の論理実証主義による哲学の清算という動きの両者を受けて、自己の「解釈学的」哲学の構想を提出しようとする。すなわちアドルノによると、一方で、自立的な理性は、現実の概念およびすべての現実を自己のうちから展開する能力があるべきである、というテーゼは解体した。マールブルク学派は、体系的完結性は保持したが、それと引き換えに現実についてのあらゆる権利を放棄し、反対に生の哲学は、現実との接触は持ち続けたが、それと引き換えに経験的知識についてのあらゆる意味付与の能力を失い、生き生きとしたものという盲目的で解明されていない自

然概念に忍従する。西南ドイツ学派は、諸価値という具体的で、扱いやすい基準を設定することで、それらの価値と経験的知識とをある関係に置くような方法をつくり上げたが、諸価値の場と起源とは定かでない。他方、論理実証主義などの言う、哲学的問題設定の個別科学的問題設定への原理的な解消可能性のテーゼは、「所与性」の主体の歴史性を無視し、他者の意識、他者の自我の解明の際の類推の基礎としての言語、および検証可能性の要請のなかに前提とされている他者の意識を無視しているがゆえに、何ら前提のないものではない。

アドルノは、いわばこの理念と現実との亀裂を架橋しようとする努力に対して、ベンヤミンから受容した独自の視座で答えるわけだが、彼にとって論争の相手として眼前にあるのは、現象学の努力、とりわけハイデッガーの「存在論」であると考えられる。アドルノによると、現象学の努力は、自律的理性によって、主観を超えて拘束力を持つような存在秩序を得ようとするところにあるが、その志向は、主観的な、デカルト学派後の思考を生み出したのと同じカテゴリーを用いて、まさにその志向が起源において異議を唱える、あの客観性を得ようとする限り、逆説的である。しかし現象学は、シェラーに至ると、あの亀裂を物質的-形而上学的に承認し、そして現実を盲目的「衝動」に委ねる、つまり自己撤回するに至る。アドルノはこの相のもとでハイデッガーをみる。

彼によると、ハイデッガーにあって実質的存在論の要求は、主観性の領域へと還元されており、そして主観性の深みに、実質的存在論が露わな豊かな現実のなかで見つけ出せないものが探し求められる。しかし、ハイデッガーが手をつけるキルケゴールの実存哲学が示すように、主観性のなかでの不断の弁証法は、確固として基礎づけられた存在に到達することはできない。この弁証法は、超越への「飛躍」によって以外に、自己をこの地獄のような場所から救い出す術を知らない。ハイデッガーはそうした帰結から、ある原理的に非弁証法的で、歴史的に前弁証法的な「客体存在的」現実を仮定することによってのみ、逃れることができる。しかし、とアドルノは続ける、ここでもまた飛躍と主観的存在の弁証法的否定 [Negat] とが、その存在の唯一の正当化をなす。ただ現存するものの分析が、信仰の超越と、主観的精神の犠牲のなかでその超越が自発的に [主観を] 捉えることを妨げており、その代わりに、かろうじて生死に関わる相存在 [Sosein] へのひとつの超越、すなわち死における超越を、盲目的かつ曖昧に承認する、というふうになっている。⁹⁸

アドルノは、ハイデッガーの死の形而上学をもって現象学は、活力説に終わろうとしており、そのことは、ハイデッガーが歴史主義による危機から、時間自体を存在論化し、人間本質の構成者 [Konstituens] として定めることと一致すると言う。単なる主観性と単なる時間性だけが、永遠のものとして残り、「被投性」の概念とともに生はそれ自身において盲目的で、意味空疎なものとなる。こうした哲学的試みに対してアドルノは、理念と現実との亀裂という問題を、異なる方向で追究しようとする。それは、ハイデッガーのように「立て組み」批判から「根源的体験」へという方向⁹⁹とは異なり、個別科学の「成果」を解釈すべきしるし [Zeichen] として把握するという解釈の立場である。アドルノによると、この解釈の理念は、現実を「意味あるもの」として示し、正当化することを任務としないがゆえに、「意味」の問題とは一致せず、またそれは、現象界の分析によって解明されるべきであるような、背後世界の仮定を要求しない。言うまでもなくここで考えられているのは、弁証法的像の理論である。直接ベンヤミンを指示している次の文章を引用しておこう。

「真の哲学的解釈は、問いの背後にすでに存在する不変の意味を見つけることではなく、問いを突然かつ即刻に明らかにし、同時にそれを吸収する [食い尽くす] ことである。そして謎の解決が生じるのは、問いの特異でまき散らされた諸要素が、それらが形象 - その形象に基づいて解決が飛び出し、他方で問いが消滅する - へと結晶するまで、さまざまな配置にもたらされることによってであると同様、哲学は、諸科学から受け取る諸要素を、それらが形象 - その形象は答えとして読み得るものとなり、他方同時に問いが消滅する - となるまで、変化する布置に、あるいはより占星術的でない、科学的に最も今日的表現で言うと、変化する実験的配置にもたらされなければならない。哲学の任務は、現実の隠れた、現存する志向を探求することではなく、現実の孤立した諸要素から形象、像を構成することにより、問い - その簡明的確な把握は、科学の任務である - を破棄することで、志向を欠く現実を解釈することである。」¹⁰⁰

この解釈は、哲学の象徴の崩壊を受けて、現実のうちの志向的なもの [Intentionale]、有意味なもの [Bedeutende] に対する拒否的態度の点で、唯物論の思考様式との親和性を示し、フロイトの宣言した「現象界の残り物」への方向転換、さらに社会心理学の経済学への方向転換は、哲学的解釈の内在的要求自体からも出てくる。アドルノはさらに、情報 [決定] は認識という閉ざされた場所にとどまるのではなく、実践が

情報[決定]を与える限り、見いだされる現実の解釈とその止揚とは、相互に関係づけられている点で、この関係を弁証法という名で呼び、さらにこうして成立する歴史的な像は、太古の原像ではなく、モデル-そこで思考の生産性と歴史的具體化とがコミュニケーションする-であることを強調し、最後に哲学的エッセイ主義との批判に対する自己の考えに触れて、論文を終えている。そして、論文「哲学者の言語についてのテーゼ」は、ここで話題となった配置的语言語というひとつの言語の特徴を示そうとする試みと解することができる。ごく簡単にみておこう。

出発点は、哲学的言語の形式と内容との区別である。アドルノによると、観念論的思考の根底には、諸概念、それとともに言葉[Worte]は、その統一が純粋に意識を構成するだろうような、多数のメルクマールの略語である、という意見がある。多様なものに、その統一が形式として主観的に刻印されるなら、そうした形式は必然的に、内容から切り離されるものと考えられている。事物の領域では、そうした切り離し可能性は、もしも存在するなら事物自体が単に主観性の産物にすぎないことになるがゆえに、否定されるが、言語の圏内では、その分離可能性が公然となる。事物は任意に名づけられることができる、すなわち言語と事物の有意な帰属の偶然性ということが、観念論的思考に属する形式と内容との区別に対応している。

それに対して、真理を志向する哲学的言語には著名[Signa]がない。アドルノによると、言語によって歴史は真理に関与する、したがって言葉は、単にそのもとで考えられているものの記号にすぎないのではなく、言葉には歴史が侵入する。すなわち歴史と真理とは言葉のうちで出合うがゆえに、歴史の真理文字[Wahrheitcharaktere]、歴史への語の関与が、あらゆる語の選択そのものを規定する。だから哲学の言語は、含まれる事柄[Sachhaltigkeit]によってあらかじめ指示されており、またその「了解可能性」、社会的伝達可能性も、哲学者に言葉を一義的に配分するのと同じ客観性に左右されるのであり、哲学的言語の社会の了解への同化の結果として生じるのではない。今日、哲学的言語の唯一正当な了解可能性は、意味される事柄との忠実な一致、そしてそれらの事柄のうちの真理の歴史的段階に従った言葉の忠実な配置のなかでのそれである。この配置的语言語について言及する前にアドルノは、ハイデッガーの言語に対する批判を行う。

アドルノによると、ハイデッガーのやり方は、言葉の歴史的課題性を考量しはするが、しかし個々人の立場からひとつの新しい哲学の言語に到達しようと努め

るようなそれである。ハイデッガーの言語は、歴史から逃れ出ることなしに、歴史の外へと逃走する、とアドルノは批判する。すなわち、ハイデッガーの言語が占める場所はことごとく、伝統的な哲学的-そして神学的-言語の場であり、この言語は微光で満ち、言葉が始まる前にあらかじめそれを形成する。他方、ハイデッガーの顕在的语言語は、哲学の伝統的语言語との弁証法的関係のなかでその崩壊を完全に暴くことをなおざりにしている。自由に定立[措定]される言語は、歴史の強制からの哲学者の自由という[不当な]要求を掲げるが、ハイデッガーにあって歴史はすでに内在的に、伝統的语言語に批判的な態度をとるという必要性への洞察によって、否定されている。というのも伝統的语言語の現下の問題性は、まさに歴史のなかにのみその根拠を持っているからである。¹⁰¹ だからアドルノは、伝統的な言語は、それが破壊されているにしても、保持されるべきであり、そして哲学者の新しい言葉は、今日、歴史のなかにある言葉の布置を変化させることによってのみ形成されるのであって、言葉に対する歴史の[権]力は承認するが、しかしその[権]力から、外見上でのみ歴史から守られた、そうした私的な「具体性」へと回避しようと努めるような言語を案出することによってではない、と言うのである。

アドルノは自己の立場について、こう言っている。哲学者は今日、崩壊した言語に直面している。彼の素材は、言葉の瓦礫であり、歴史は彼をそれと結びつける。彼の自由は唯一、瓦礫のうちの真理の強制に従って瓦礫を配置する[Konfiguration]可能性である。彼は、ある言葉を所与のものとする必要もないし、ある言葉を案出する必要もない、と。この配置的语言語についてアドルノはさらに、次のように敷衍する。今日の社会状態のなかでは、哲学者自身の意図に言葉はあらかじめ与えられておらず、そして客観的に存在する哲学者の言葉は、存在が空疎で、彼にとって拘束力がない。彼に残された希望は、言葉を、その純然たる布置が新たな真理を生み出すような仕方、新たな真理の回りに配置することだけである。この配置的语言語は、伝統的な言語と、言語を欠く主観的な志向に対して、それが概念と事物との弁証法的に交差し、説明の上で分解できない統一を意味するという意味で、ひとつの第三者である、と。

アドルノは、すべての哲学的批判は今日、言語批判として可能であり、それは単に事物に対する言葉の「適切性」にだけでなく、同様にそれ自身における言葉の状況にも及ぶ、とする。彼によると、言葉に対して、それはどの程度、それらに期待された志向を担う能力

があるのか、その力は歴史的にどの程度失われたのか、それは、例えば配置的にどの程度保持されるのだろうか、といったことが問われなければならない。そして彼は、その際の基準として言葉の美的尊厳を挙げ、哲学には言語と真理との統一の方に引き、その真理を弁証法的に言語で推し量る必要性を、芸術には、認識性格を持つ必要性 - 芸術の言語は、それが「真」である場合にのみ、美的に調和のとれたものである - を指摘する。そして彼は最後に、内包論理的定義、観念論的 - 体系的演繹、抽象的な表面的連関を用いるような思考は、単に不適切な言語形式を持つというだけでなく、それは事柄に即して虚偽でもあると批判し、哲学的形成物の実質的 [sachlich] 構造と、その形成物の言語構造とが、一致はしなくとも少なくともある種の緊張関係に立つことを強調している。

論文「自然史の理念」は、以上の二つの論文と連関して、「神話的なもの」とその批判の視点から、自然史という歴史哲学を構想する試みである。シュミート・ネアの優れた研究を参照して、この歴史哲学的構想と、ホルクハイマーによる「自然」の問題系導入および人間学的思想の変化との関係を追及することが、筆者の研究プロジェクトの第二の内容をなす。¹⁰² ここでは、ひとつの予備的考察として、『啓蒙の弁証法』の「啓蒙の概念」の章に含まれた言語哲学的考察に一瞥を与えておきたい。¹⁰³

三節からなる「啓蒙の概念」の章はその第二節で、言語哲学的視点から啓蒙の概念を解明しようと試みている。筆者にはそれは、理性の自己反省ないし思考の自己省察という思考様式と、ひとつの言語哲学とを媒介しようとする試みであるように思える。

ここでも、象徴的なものの契機としての記号と像との関係が扱われている。反復する自然を核心とする象徴的なものは、啓蒙の過程でその両契機が分離し、また反復する自然と社会的強制とが不透明に一体化すると、本来は両契機の間に入った亀裂を架橋しようとする努力だった哲学の言語は、形而上学的言語においても科学的言語においても、その内容が悪しき一般性を身につけるようになる。¹⁰⁴ 周知のように、それに対して著者たちが対置するのが、「限定的否定」の概念である。すなわち、像の権利は、それを描くことの禁止を忠実に実行することによって救われる。彼らによると、弁証法は、懐疑主義と、その反対のリゴリズムとは異なり、あらゆる像をテキストとして開示する。弁証法は像の諸特徴から、像からその [権] 力を奪い取り、その [権] 力を真理に帰する、像の虚偽性の告白を読み取ることを教える。それによって言語は、単なる記

号体系以上のものになる、というわけである。¹⁰⁵

以上のような記述に、ベンヤミン・アドルノによる研究の基礎をなす言語哲学的考察方法の影響が窺えることは明らかだが、しかしホルクハイマーはその影響を、彼本来の思考の自己省察という視点から受け取り、ひとつの疎外論 - それは独特な「欲望論」を内包している - を基礎とした記憶と判断の理論を展開する方向へと導いてゆく。すなわち、彼は、思考 - その強制メカニズムのなかで自然は自己を反省し、存続させる - はまさにその止めがたい結果によって、自己自身を、自己自身を忘れた自然として、強制メカニズムとして反省すると言い、したがって啓蒙は啓蒙以上のもの、すなわちその疎外において知覚可能となる自然である、と言うのである。精神が、自分自身と不和になった自然として自己を認識することのうちで、自然は太古と同じように、自己自身に呼びかけるが、しかしそれは今では、もはや直接全能を意味するその臆測上の名によって、つまりマナとしてではなく、盲目的なもの、傷つけられ損なわれたものとしてである。概念を用いてなされるこの思考の自己省察は、不正を永遠化する隔たりを見きわめさせるものだが、ホルクハイマーはそうした主体の内での自然の想起 - その遂行のうちにすべての文化の見損なわれた真理が含まれている - によって、啓蒙は支配一般と対立しているのだ、と言っている。文化的アヴァンギャルドの立場とは異なる、彼のこの記憶と判断の独特な利用について検討することが、彼によるイデオロギー批判の第二の段階を解明する作業の一つの中心をなす。

以上の考察を踏まえて最後に節を改め、ホルクハイマーの人間学的研究の構成について概観を与えておくことにしたい。

IV 人間学的研究理解のための構図

本稿は、ホルクハイマーの人間学的研究理解のための前提として、この研究にとって構成的な文脈の解明をめざした。このプロジェクトの第一段階は、ニーチェおよびマルクスによる根底的、現代的な理性批判を、社会理論のレベルを媒介として受け止めるところに成立したと考えられる。ホルクハイマーは、マルクスから受容した変革への意志を背景に、ニーチェによる問題提起を、より分化した形で、また実質的に批判する形で追究するのだが、この彼の歩みは彼の人間学的認識、具体的には市民の人間の質への洞察・分析と結びついていた。筆者は、30年代に生じたこの点でのホルクハイマー思想の展開を、二つのステップで再構成す

るよう、試みてみたい。

まず第一に、特に『権威と家族』に現れてくる、ホルクハイマーにおける社会理論と人間学との関連について、その特徴を解明したい。この作業を行うために筆者は、社会研究所内部のナチズムの解釈に対する論争の内容とその意味とを考察してみたい。ここでは、一方のノイマンおよびキルヒハイマーが推進する、唯物論的法理論に基づくナチズムの分析・批判と、他方のポロックおよびホルクハイマーが提出する、「国家資本主義」の理論とを、ゼルナーやヴィッガースハウスによる先行研究を参照しながら検討してみると、内容の点では論争の当事者が強調するほどの違いがないことを示すとともに、違いは、ホルクハイマーにとって問題なのは近代社会の人間学的次元であることから生じるということを示明かにしたい。この点では、ホルクハイマーの思想が社会学の、いわゆる「エートス問題」を引き継ぐものであることにも言及することにしたい。¹⁰⁶

第二に、特に論文「唯物論と道徳」および「エゴイズムと自由を求める運動」に現れてくる、ホルクハイマー本来の関心である「道徳」批判と人間学的研究との関連について、その内容を考察したい。ここでは、シュネーデルバッハの研究を検討することを通じて、ホルクハイマーの批判的理論が内包した唯物論的道徳の構想の特徴を明らかにし、さらにシュミート・ネアの研究に従って、ホルクハイマーにおける同情倫理学の理解を検討した後、「残忍性の心理学」として展開される、ホルクハイマーの市民的道徳批判の内容について考察したい。ここでは、人間の心的状態、さらに道徳的感情を洞察・分析する彼のまなざしの鋭さ・繊細さを明らかにすると同時に、市民的道徳は一定の歴史的・社会的条件のもとでは市民的ニヒリズムと攻撃へと導く、という彼の判断に特徴的な仕方で見られる、ホルクハイマーという思想家と時代との対峙について、筆者なりの理解を示したい。¹⁰⁷

ホルクハイマーの人間学的研究の第二段階は、いわゆるホルクハイマーの「転回」と連動して生じる。30年代の批判的理論のプロジェクトの挫折は、ホルクハイマーに新たな合理性の理論の探求を促すが、彼はそれを「理性」と「自然」の関係の考察を基礎に追究していったと考えられる。『啓蒙の弁証法』、『理性の腐食』、さらには彼の言語論的試論として捉えられる論文「繫辞と包摂」および「歴史への信頼」などには、「神話的なもの」とその批判というモチーフが現れてくる。ここでは、本稿で検討したベンヤミン-アドルノの言語哲学的考察方法を念頭に、シュミート・ネアの研究に

従い、アドルノの「自然史」の理論を検討し、そしてホルクハイマーとアドルノ両者の弁証法把握の相違と「心理学的なもの」の把握の仕方の相違を明らかにし、それらを踏まえて、『啓蒙の弁証法』の「ジュリエット」の章が、実質的に「残忍性の心理学」の再構成として理解されるのではないかという解釈を提出する。¹⁰⁸

本稿は、ホルクハイマーの人間学的研究にひとつの統一的な理解・解釈を与えようとする筆者の研究プロジェクトの基礎をなす、- ニーチェとベンヤミンの思想の受容をキーワードとした - 研究の二つの文脈を解明したところで、ひとまず筆を擱くことにしたい。

- 1 Cf. Hennis [1987: 119]
- 2 Cf. Gumnior/Ringuth [1973: 7] 著者たちはそこに、1916年7月16日付けの、父親に宛てたホルクハイマーの手紙を載せている。
- 3 後に『黄昏』の表題のもとにまとめられ、出版された。Horkheimer [1934]
- 4 筆者は前著で、ブルクホルストの説を参照しながら、ルカーチの提出した西欧マルクス主義のパラダイムの中核をなす、マルクス-ヴェーバー的な物象化（および合理化）の問題と、ヘーゲル-マルクス的な階級意識（および理論と実践の統一）の問題のうちで、批判的理論のパラダイムに受容されたのは、主に前者の物象化論である、という見方を提出した。森田, [2000: 62ff.] を参照されたい。
- 5 筆者は、森田 [2002: 36ff.] で、両者の討論の記録のなかに、ホルクハイマーの非完結的弁証法の視座と、アドルノの弁証法的像の視座との違いの一端を探ろうとする試みを行った。また森田 [2003: 165ff.] は、シュミート・ネアの説を検討するなかで、両者の視座と同情倫理学の理解・評価の仕方の違いを明らかにしようとしている。
- 6 以下で、両者のニーチェ受容と、自然・言語把握に焦点を合わせて検討してゆきたい。
- 7 例えば、筆者は前著で、シュネーデルバッハの研究に従いながら、ホルクハイマーにおける批判的理論の規範的基礎、とりわけ関心 [Interesse] 概念の持つ問題性について、若干の考察を行った。森田 [2000: 86ff.] を参照されたい。この問題には、さらにさまざまな角度から触れることになる。
- 8 ショーペンハウアーを前提とし、ニーチェが「真理」と「心理学」の問題性を展開することの意味に対するホルクハイマーの理解については、戦後の講義録からも窺うことができる。Cf.

- Horkheimer, Max [1954: 335ff.]
- 9 根底的な理性批判は、自己関係的な態度をとる、すなわち批判は、根底的であって同時に自己の基準に触れないということとはあり得ない、という事態に対するホルクハイマーの不安については、ハーバーマス [1986 : 171] が指摘している。
- 10 Rath, Norbert [1987]
- 11 森田 [2000 : 134ff.] は、この転回的前提について輪郭を描こうと試みている。
- 12 Habermas [1986], さらにより広い文脈では, Habermas [1985] を参照されたい。
- 13 Cf. Horkheimer [1946a]
- 14 Cf. Horkheimer [1939 und 1946b] さらにアドルノとの一連の対話については、森田 [2002] で若干触れた。
- 15 具体的には、『啓蒙の弁証法』の「ジュリエット」の章に対する著者なりの理解がめざされることになる。Horkheimer/Adorno [1947]
- 16 Menninghaus [1980]
- 17 ここで検討の対象となるのはとりわけ、『アドルノ著作集』第一巻に収められた、三つの講演とテーゼ [1931 und 1932 und in den frühen dreißiger Jahren] である。
- 18 アドルノの『否定の弁証法』と、とりわけ『本来性という隠語』を、言語の側面から見るという作業である。
- 19 ニーチェの思想を、記憶と判断の独特な利用を基礎とする思考様式のもとで解釈する、という方向での変化である。第三節および森田 [2002] を参照されたい。
- 20 Rath [1987]。なお、ホルクハイマーによるニーチェからの引用、ニーチェへの言及については、現在では『ホルクハイマー著作集』第19巻に収められた詳細な索引によって、接近・確認が非常に容易になった。
- 21 それにも拘わらず、ホルクハイマーの思想が、30年代においても分裂的性格を示すことについては、例えばブルクホルスト [1985] などが指摘している。
- 22 Rath [1987 : 87-88] ラートはここで、ハーバーマス [1986] に依拠している。
- 23 Horkheimer, u.a. [1942]
- 24 討論への参加者は、アドルノ、ホルクハイマー、ヘルベルト・マルクーゼ、ポロックという社会研究所のメンバーと、ギュンター・アンダース、ハンス・アイスラー、NBG、ハンス・ライヒェンハッ
- ハ、ベルトールト・フィアテル、そしてブレヒトというブレヒト・グループ、さらにどちらにも属さないルードヴィヒ・マルクーゼからなり、そのねらいの一つには、二つのグループをより密接に結びつけるということがあったと『ホルクハイマー著作集』の編者は言っている。
- 25 ラートによると、アドルノはすでに16才の生徒の時にニーチェを知っており、生徒新聞への寄稿論文では、心理学者の模倣者としての自分の力を試しているが、1927年(『超越論的心理学における無意識的なものの概念』)には、ニーチェの「力の哲学」を「ファシズムのイデオロギー」を助長するような非合理主義の側に置いている。ニーチェとは反対にアドルノにとって問題なのは、「無意識的なものの魔力からの解放」であり、そのために役立つのは、「無意識的なものに対する認識の優位を押し通す能力と意欲とがある」、フロイトの精神分析を関連づけることである、というわけである。『キルケゴール』(1933)では、キルケゴールとニーチェの両者にあって大衆に対する敵意には、「人間を大衆にする支配メカニズムによる、人間の不具化への洞察が多少とも隠れている」という「客観的な」洞察が示されている。『ヴァーグナー試論』(1937/38)は、ヴァーグナーを裁き、ニーチェを正しいとするが、稀に一つの没落の論理である弁証法的思想をもってヴァーグナーの「デカダンス」を弁護する。この、いわゆる「デカダンス研究」の内容と意義については、別稿を期したい。
- 26 Rath [1987: 76ff.]
- 27 Rath [ebenda]. なお、本文はHorkheimer, u.a., [1942 : 565ff.]
- 28 Rath [1987: 79]
- 29 ラートが挙げる著作名だけを記しておく。フーコー『ニーチェ、系譜学、歴史』、スローターダイク『舞台の上の思想家。ニーチェの唯物論』、ルカーチ『理性の破壊』、ハーバーマス『モデルネの哲学的ディスクルス』、シュミット「ニーチェの認識論における弁証法の問題」、ハーバーマス『認識と関心』、シュベッペンホイザー「ニーチェ - 主体の内での自然の想起」、ネクト/クルーゲ『歴史と自己固執性』
- 30 Rath [1987: 79-80]
- 31 Rath [ebenda: 80-87]
- 32 ホルクハイマーの本文は、Horkheimer [1934 : 338] を参照されたい。しかしラートは、ニーチェがこの文脈で語っているのは、この教養は抑圧を土台

- としているということに対する「羞恥の感情」、自己の自然主義的文化概念に基づいて、彼がそれにも拘わらず不可避と断言することに対する「羞恥の感情」についてである、と付言している。人は「華麗な文化を、凱行列の際に自分の馬車に繋がれた被征服民を奴隷として一緒に引きずって行くような、血が滴っている征服者と比較」できるであろう。Nietzsche[1872:768ff.]
- 33 Rath [ebenda: 81], Horkheimer [ebenda]
- 34 Rath [ebenda]ホルクハイマーの原文は、Horkheimer [1933:129-130]を参照されたい。
- 35 Cf. Horkheimer [1936:75]
- 36 ラートは、両者の距離を最も明瞭に示しているのは、ホルクハイマーの哲学的文体と、暗示的な、修辭的效果を当て込んだ、しばしばもったいぶるか、ないしは反語的なニーチェの言葉との隔たりかもしれないしつつも、真と認識されたもの、あるいは真と見なされたものを、衝撃的にであれ、自己破壊的にであれ、言い表わすことへのニーチェの勇気と力に、ホルクハイマーは感嘆していると言っている。筆者は、第3節でこの論点を筆者なりに展開する糸口を掴むよう、試みてみたい。
- 37 この筆者の研究プロジェクトについては、第4節でその全体的構図を描いてみたい。
- 38 「啓蒙の概念」および「ジュリエットあるいは啓蒙と道徳」の章はホルクハイマーの、「オデュッセウスあるいは神話と啓蒙」および「文化産業」の章はアドルノの手になることとされるのが、一般的な見方である。また、「反ユダヤ主義の諸要素」および「手記と草案」の章も、主たる執筆者はホルクハイマーであるとされる。
- 39 Rath [ebenda: 87-88]
- 40 Rath [ebenda] Horkheimer/Adorno [1947: 67-68]
- 41 ラートによると、セイレンの挿話がほのめかされ、理性の暗い基礎となり、等価交換、主観性の歴史、思考の間の、負債と罪悪感との間の、太古の復讐と正義の体系との間の根源的連関が問題となることなどの点で、アドルノが範としているのは、ニーチェの『道徳の系譜学』である。
- 42 ラートは、次のホルクハイマーの文章を引用している。「彼 [ニーチェ] は、あらゆる偶像の黄昏の只中にありながら、観念論的な習癖 - それは、取るに足りないこそ泥は縛り首になるのを見たがるが、帝国主義的侵略は世界史的使命に仕立て上げたがる - を断つことができない。ドイツのファシズムは、強さの崇拜を世界史の法則へと高めたことによって、同時にそれを特異な不条理へと導いた。」Rath [ebenda: 89-90] Horkheimer/Adorno [ebenda: 124]
- 43 Rath [ebenda: 90] Horkheimer/Adorno [ebenda]
- 44 Rath [ebenda: 91]
- 45 Rath [ebenda: 92]
- 46 森田 [2002] は、不十分ではあるがこの問題を論じたものである。
- 47 ラートは、『理性の腐食』はこれら二つの反省形式の間にある、と位置づけている。
- 48 ラートによると、シュミットは、「カントの構成問題の、歴史的-社会的再定式化と、生物学的-プラグマティックな再定式化との間でのホルクハイマーの動揺」を、調停されない「マルクスの説の亀裂」に帰す。Rath [ebenda: 95]
- 49 ラートは、ホルクハイマーの悲観論には、「理論の実体化に反対して」はたらくという機能がある、という。彼は、ホルクハイマーに、言語的形態をとる支配とそれに対する批判という視点、さらに沈黙という選択肢があることに触れている。Rath [ebenda: 96-97]
- 50 Rath [ebenda: 98]
- 51 Rath [ebenda: 99] ニーチェの著作は、芸術作品と同じように解釈され、その著作の「客観的」真理は、著者自身によって企てられた「仮象」をはるかに超える、とされる。ラートは、この論証過程を以下のように分解している。1. ニーチェは最も首尾一貫した啓蒙 [主義] 者である。2. 純粹な結果だけでは十分でない。啓蒙主義についてのニーチェの自己反省は、非弁証法的なままである。彼は矛盾を未展開のままにしておく。3. それゆえ、次のように言うことができる。彼は、思想のクーデターを起こす。彼の唯美主義は、逆説的であり続ける。- ラートは、ここまでは、ハーバーマスのニーチェ批判は、彼の師 [アドルノ] の批判と一致するが、しかしハーバーマスは、次の一步はもはや共にしない、という - 4. それゆえニーチェは、簡単に拒否されるべきではなく、彼の矛盾にさえ、弁証法的イデオロギー批判のなかで読解できるようになる真理が表われている。5. そうしたニーチェの読みから得られる認識はこう述べる、仮象の契機なしの真理は存在しない、と。- ラートは、この構想はヘーゲルの断定を想起させる、という。「それでも仮象自体は、本質にとって本質的であり、真理は、輝き現れないなら、存在しないであろう。」6. 芸術は、あらゆる真理の仮象

- 性格を公にする真理である。それに対応してニーチェは、あらゆる形而上学的「真理」の仮象性格を暴露した。
- 52 Rath [ebenda : 100] ラートは、『認識と関心』から次の文章を引用している。「ニーチェは、方法論的研究の射程に対する感覚を、自己反省の次いで敏捷に動く能力と結びつけている、数少ない同時代人の一人である。…」
- 53 ラートは一つの例として、言語と合理性を結びつける見方に対して、言語を修辭的技法の結果と見るような、ニーチェの理解を対置している。Rath [ebenda : 102]
- 54 Cf. Horkheimer/Adorno [1939, und 1939?] また森田 [2002] を参照されたい。
- 55 森田 [2002] は、それを非完結的弁証法の視座(ホルクハイマー)と弁証法的像の理論(アドルノ)の違いとして特徴づけようと試みている。
- 56 Cf. Menninghaus [1980]
- 57 それは、ベンヤミン-アドルノの配置的言語という考え方と、ホルクハイマーの、ひとつの疎外論を基礎にした記憶と判断との独特な利用という視点との違いを含む。以下を参照されたい。
- 58 言語に関する初期の綱領的諸論文とは、Benjamin [1916, 1921, 1933 und 1933a] である。
- 59 Benjamin [1916]
- 60 『ドイツ悲劇の根源』のはじめに置かれた「認識批判的序章」は、初期論文の第二段階という位置づけを与えられている。Cf. Benjamin [1928]
- 61 Menninghaus [1980: 10]
- 62 [Ebenda]
- 63 [Ebenda : 11] このことは、言語において非-有意的に [nicht-signifikativ] 現れるもの、というふうにも言われている。
- 64 [Ebenda: 17]
- 65 メニングハウスは、言語の魔力という語も、伝えられた言語反省の形態であるという。それは、第一に、直接神学的-神秘的な言語の思索の出発点である。第二に、それは神秘的伝統を世俗化するロマン主義的な言語反省の、一つの中心的トポスである。そして第三にそれは、日常言語も持つ広く流布したひとつの特徴である。[Ebenda : 18-19]
- 66 またメニングハウスによると、ハーマンにとってと同様、ロマン派的な言語反省にとっても、カバラは、道具主義的(にすぎない)言語把握との間に距離を置くことの、機能的な総括概念である。[Ebenda : 27]
- 67 [Ebenda: 35ff.]
- 68 いわゆる神的言語、とりわけアダムの言語の理論に対するベンヤミンの制限された関係については、[Ebenda : 35-36] を参照されたい。ベンヤミンにとって重要なのは、人間の言語においては、主体的に定立する契機と一種の受容的な契機が働いている、ということだけである。
- 69 [Ebenda: 36]
- 70 [Ebenda : 40-41] 前出のように、「名」は、言語の言語といった位置づけをなされている。
- 71 [Ebenda: 57]
- 72 「認識批判的序章」については、後で論じることにした。
- 73 ミメーシスと非感覚的類似性との交差を媒介するのが、言語である。[Ebenda : 63ff.]
- 74 [Ebenda: 68]
- 75 さらにメニングハウスは、魔力と魔力の解体についてのベンヤミンの理解に触れ、それを、言語発展の道筋は、話すことの魔力的機能と世俗的機能とが、後者にとって有利な結果となるように解体されるところに見られるが、しかしそれは、魔力的機能そのものが「解体」されるのではなく、それがオカルト的呪文の直接的要素として存在するのをやめ、「残すところなく」「世俗的機能」に入り込むと理解されている、というふうにもまとめている。[Ebenda : 75ff.]
- 76 先の「創造の物語」の場合と同様、ここで引き合いに出される「墮罪の物語」の解釈も、合理的な議論を排除しているように見えるが、メニングハウスはそれを、「世俗的言語」に「翻訳」するよう、試みる。
- 77 [Ebenda: 45]
- 78 [Ebenda : 46-47] メニングハウスは、この外面的な人間-言葉と裁く神-言葉との混合の内的根拠は、ベンヤミンの反省媒体 [媒質] に内在すると、任意的な「人間の言葉」は、墮罪において善と悪について判断しようとする、ないしはまた墮罪の物語からは独立に、抽象的な意味(シニフィエ)と任意の音声(シニフィアン)を「単なる記号」(シーニュ)へと任意的に結び合わせることにより、論理的判断形式のひとつの言語的変種を実現する、というところにあるかもしれないと言っている。
- 79 [Ebenda: 48]
- 80 [Ebenda: 80]
- 81 ベンヤミンの特殊な「根源」概念については、メニングハウス [1987] も参照されたい。そこでは、

ベンヤミンの「構造主義的」なものの方、さらにデリダの理論との類似性について、説得的な議論が展開されている。またメニングハウスは、ベンヤミンにおける引用の持つ意味について、同じ言語形態の内在的な両極を媒介すべきもの、すなわちそれは、語の道具的意味を「破壊し」、そしてその際、語の魔力的-観相学的意味論を「掻き立て」、語の「明白な世俗的な意味」に対して「その多少とも隠れた象徴的側面」を前面にもたすべきものであった、と言っている。[Ebenda: 89]

82 [Ebenda: 95-134]

83 メニングハウスは、バロック悲劇の研究にとって初期の言語研究が持つ意味を、問題設定、叙述方法、さらにテーマの実質的な実行の点において記述している。[Ebenda: 126-127] 先に記した、バロック悲劇研究で実地に適用された「構造主義」については、バルト、デリダとの比較考察も含めた別稿が必要である。

84 Cf. Benjamin [1938 und 1940]

85 メニングハウスは、『悪の華』に収められたボードレールの詩「アレゴリー」を、アレゴリーのアレゴリーとして解釈する、興味深い分析を提出しているが、残念ながらここではこの分析に立ち入ることはできない。

86 メニングハウスも言うように、それらは大文字で書かれていることで認識可能である。

87 メニングハウスは、ベンヤミンによるボードレールにおけるアレゴリーの扱いを、一方の、「万物照応」の反対極としての「アレゴリー」の位置づけ、およびバロック・アレゴリーとの比較によるボードレールのアレゴリー的表現法の美的特殊化と、他方の、現下のアレゴリー的諸形式およびそれと競合する芸術のための芸術理論の双方に対する境界設定という要素から捉えている。Mennighaus [Ebenda: 138]

88 メニングハウスは、主題としての都市との関連で、ボードレールにあって古代は、ある「特定の過去」ではなく、「現代[モデルネ]の回転しながら進み続ける車輪」の絶えざる痕跡にすぎない、という「二重写し」について語っている。[Ebenda: 144]

89 このショック体験へと墮落した願望充足の形態ということに関して、筆者にはアドルノによるヴァーグナーの「身振り」の特徴づけ-聴衆からの疎外を前提とした、打ち鳴らす[Schlagen]という身振りや計算された時間[Zahlzeit]といった要素からなる-が想起されてならない。Adorno[1937-38: 28]

ヴァーグナーの「言語」、広く音楽言語の形式内容を、アドルノのモノグラフィーを検討することによって明らかにすることは、次の課題である。その際には、例えばヴァーグナーの音楽を「言語」と捉えることはどの程度妥当するのかといった、メディア論の側からの問題提起も検討することになる。Cf. Kittler[1987]

90 メニングハウスは、それは、バロック悲劇の実際的-劇作技法上の登場人物の、バロック悲劇-アレゴリーの形式性格への「移行」におけるバロック・メランコリーの理論がそうであるのとまったく同様である、と言っている。[Ebenda: 153]

91 [Ebenda: 103] しかしそれは美的であること、そしてボードレールは少なくともそれに心を奪われたことを、忘れてはならない。

92 [Ebenda: 161]

93 このことは、先に触れた古代と現代[モデルネ]の「二重写し」と関連する。

94 「遊歩者は、一方で密集した顧客の『魅力』に身を委ね、他方で商品の展示価値に身を委ねる。」 [Ebenda: 157]

95 メニングハウスによると、ボードレールは、群衆に対して孤立した者が示す非追従主義的身振りの「単なる」保持に、それが詩人であれ、賃金労働者であれ、あるいは屑拾いであれ、ダンディーであれ、あるいは無頼漢であれ、陰謀家であれ、彼が英雄的と見なす人物像の特徴を見て取っている。 [Ebenda: 159]

96 先に断ったように、ここではボードレールの詩「アレゴリー」の分析に立ち入ることはできない。メニングハウスはその後さらに、ボードレール研究と初期の言語論文との関連(全体としての問題設定、叙述問題・理論、抽象化の理論-言語哲学、歴史哲学[言語の墮罪])に言及し、さらに特定の言語要素と言語知覚についてのベンヤミンの覚書に触れ、そして章を改めて、言語神秘主義と日常言語の哲学との関連-前者を世俗化しながら我がものとする-について論じている。

97 これらの論文、さらにはアドルノの後の著作活動を支えるエレメントの一つは、ベンヤミンの残したモチーフの展開にあるというのが、筆者の想定である。

98 周知のように、『本来性という隠語』では、実存論的存在論は、それがひとつの所有関係を基礎に把握されるがゆえに媒介が無視され、ハイデッガーの同一哲学は、現存在特に主観概念の二重性を考

- 慮に入れていない，と批判されることになる。Cf. Adorno[1964：491ff. 邦訳139頁以下]
- 99 メルヒェン[1980]は，ハイデッガー学派の視点から，「力」と「支配」の問題を基礎に置いて，「立て組み」批判から「言語」批判へと展開して行くハイデッガーの歩みと，アドルノの思想との間に，対話の可能性を拓こうと努めているが，やはりそこには媒介の視点が希薄なように思える。
- 100 Adorno [1931: 335]
- 101 言うまでもなく，ハイデッガーにあって「根源」は，言の実体化に等しい。Cf. Mörchen[Ebenda：71ff.]
- 102 森田 [2002] を参照されたい。
- 103 いまでは，「啓蒙の概念」の章の主たる執筆者はホルクハイマーであることが，相当高い蓋然性をもって推測される。しかし一部かなりアドルノの手が入っている箇所があるとされてもいるが，おそらくそれはこの箇所であろう。
- 104 言うまでもなく，形而上学の概念と，実証主義 - ここでは事実的なものの神話化と表現される - との同時批判は，ホルクハイマー本来のモチーフであるが，ここではそれが，言語批判の水準で遂行されている。
- 105 以下，テキストでは周到な実証主義批判が行われる。
- 106 森田 [2004] を参照されたい。
- 107 森田 [2003] を参照されたい。
- 108 森田 [2002] を参照されたい。
- 引用文献**
- Adorno, Theodor W., 1931, >Die Aktualität der Philosophie<, in: Adorno, Theodor W., *Gesammelte Schriften*, Bd.1, Suhrkamp Verlag.
-1932, > Die Idee der Naturgeschichte <, in; Adorno, Theodor W., *Gesammelte Schriften*, Bd.1, Suhrkamp Verlag.
-in den frühen dreißiger Jahren, >Thesen über die Sprache des Philosophen<, in; Adorno, Theodor W., *Gesammelte Schriften*, Bd.1, Suhrkamp Verlag.
-1937-38, *Versuch über Wagner*, in; Adorno, Theodor W., *Gesammelte Schriften*, Bd.13, Suhrkamp Verlag.
-1964, Jargon der Eigentlichkeit, in; Adorno, Theodor W., *Gesammelte Schriften*, Bd.6, Suhrkamp Verlag. [『本来性という隠語』笠原賢介訳，未来社]
-1966, *Negative Dialektik*, in; Adorno, Theodor W., *Gesammelte Schriften*, Bd.6, Suhrkamp Verlag. [『否定弁証法』木田元他訳，作品社]
- ボードレール, 1857 [1988], 『悪の華』注釈，上・中・下，多田道太郎編，京都大学人文科学研究所。
- Benjamin, Walter, 1916, >Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen<, in; Benjamin, Walter, *Gesammelte Schriften*, Bd.II・1, Suhrkamp Verlag. [『言語一般および人間の言語について』浅井健二郎訳，『ベンヤミン・コレクション 1』筑摩書房，所収]
-1921, >Die Aufgabe des Übersetzers<, in; Benjamin, Walter, *Gesammelte Schriften*, Bd.IV・1, Suhrkamp Verlag. [『翻訳者の使命』内村博信訳，『ベンヤミン・コレクション 2』筑摩書房，所収]
-1928, *Ursprung des deutschen Trauerspiels*, in; Benjamin, Walter, *Gesammelte Schriften*, Bd.I・1, Suhrkamp Verlag. [『ドイツ悲劇の根源』上・下，浅井健二郎訳，筑摩書房]
-1933, >Lehre vom Ähnlichen<, in; Benjamin, Walter, *Gesammelte Schriften*, Bd.II・1, Suhrkamp Verlag.
-1933a, >Über das mimetische Vermögen<, in; Benjamin, Walter, *Gesammelte Schriften*, Bd.II・1, Suhrkamp Verlag. [『模倣の能力について』内村博信訳，『ベンヤミン・コレクション 2』筑摩書房，所収]
-1938, >Das Paris des Second Empire bei Baudelaire<, in; Benjamin, Walter, *Gesammelte Schriften*, Bd.I・2, Suhrkamp Verlag. [『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』野村修訳，『ベンヤミン著作集 6』晶文社，所収]
-1938~40, >Zentralpark<, in; Benjamin, Walter, *Gesammelte Schriften*, Bd.I・2, Suhrkamp Verlag. [『セントラルパーク』久保哲司訳，『ベンヤミン・コレクション 1』筑摩書房，所収]
-1940, >Über einige Motive bei Baudelaire<, in; Benjamin, Walter, *Gesammelte Schriften*, Bd.I・2, Suhrkamp Verlag. [『ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて』久保哲司訳，『ベンヤミン・コレクション 1』筑摩書房，所収]
- Brunkhorst, Hauke, 1985, >Dialektischer Positivismus des Glücks. Max Horkheimers materialistische Dekonstruktion der Philosophie<, in; *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Bd.39, Verlag Anton Hain.
- Gumnior, Helmut/Ringguth, Rudolf, 1973, *Horkheimer*, Rowohlt Taschenbuch Verlag.
- Habermas, Jürgen, 1986, >Bemerkungen zur Entwicklungsgeschichte

- des Horkheimerschen Werkes<, in; Schmidt, Alfred und Altwicker, Norbert (Hg.), *Max Horkheimer heute: Werk und Wirkung*, Fischer Verlag.
- Hennis, Wilhelm, 1987, *Max Webers Fragestellung*, J.C.B.Mohr Tübingen.
- Horkheimer, Max, 1933, >Materialismus und Moral<, in; Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd.3, Fischer Verlag.
-1934, *Dämmerung*, in; Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd.2, Fischer Verlag.
-1936, >Egoismus und Freiheitsbewegung<, in; Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd.4, Fischer Verlag. [「エゴイズムと自由を求める運動」森田編訳『批判的社会理論』恒星社厚生閣, 所収]
-1939, [Kopula und Subsumtion], in; Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd.12, Fischer Verlag.
-1946a, >Die Vernunft im Widerstreit mit sich selbst<, in; Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd.12, Fischer Verlag.
-1946b, >Vertrauen auf Geschichte<, in; Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd.12, Fischer Verlag.
-1954, >Vorlesungsnachschriften: Fragen der Geschichtsphilosophie <, in; Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd.13, Fischer Verlag.
-1996, Verzeichnisse und Register, in; Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd.19, Fischer Verlag.
- Horkheimer, u.a.,1942, [Diskussionen aus einem Seminar über die Theorie der Bedürfnisse], in; Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd.12, Fischer Verlag.
- Horkheimer/Adorno, 1939, [Diskussionen über die Differenz zwischen Positivismus und materialistischer Dialektik], in; Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd.12, Fischer Verlag.
-1939?, [Diskussion über Dialektik], in; Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd.12, Fischer Verlag.
-1947, *Dialektik der Aufklärung*, in; Horkheimer, Max, *Gesammelte Schriften*, Bd.5, Fischer Verlag.
- Kittler, Friedrich, 1987, >Weltatam. Über Wagners Medientechnologie<, in; Kittler, F.A., Schneider, M., Weber, S. (Hg.) *Diskursanalysen 1. Medien*, Westdeutscher Verlag.
- Mörchen, Hermann, 1980, *Macht und Herrschaft im Denken von Heidegger und Adorno*, Klett-Cotta.
- Menninghaus, Winfried, 1980, *Walter Benjamins Theorie der Sprachmagie*, Suhrkamp Verlag.
-1987, *Unendliche Verdopplung*, Suhrkamp Verlag. [『無限の二重化』伊藤秀一訳, 法政大学出版局]
- 森田数実, 2000, 『ホルクハイマーの批判的理論』恒星社厚生閣。
-2002, 「ホルクハイマーの批判的人間学(1)」, 『東京学芸大学紀要』第3部門, 社会科学, 第53集, 所収。
-2003, 「ホルクハイマーの批判的人間学(2)」, 『東京学芸大学紀要』第3部門, 社会科学, 第54集, 所収。
-2004, 「ホルクハイマーの批判的人間学(3)」, 『東京学芸大学紀要』第3部門, 社会科学, 第55集, 所収。
- Nietzsche, Friedrich, 1872, >Der griechische Staat<, in; Nietzsche, Friedrich, *KSA 1*, Walter de Gruyter Verlag.
- Rath, Norbert, 1987, >Zur Nietzsche-Rezeption Horkheimers und Adornos<, in; Reijen, Willem van und Schmid Noerr, Gunzelin (Hg.) *Vierzig Jahre Flaschenpost: >Dialektik der Aufklärung<1947 bis 1987*, Fischer Verlag.